ふびきの

3

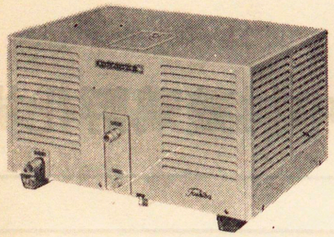
東京農大畜友会

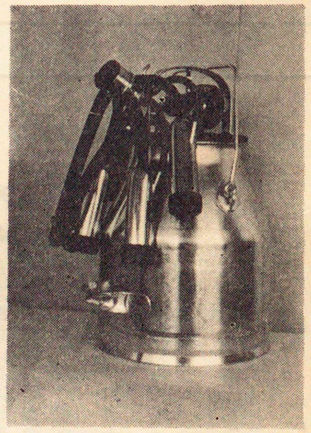
国内に海外に躍進する酪農機械

東芝の技術とオリオンの経験が結晶

オリオンダッシュクーラ新発売!!

■小型高性能トロップクーラ
■強制循環式により水温のムラがない
■二重安全装置付





営業品目

パイプラインミルカー　ミルカー
連動スタンチヨン　ユニットクーラー
フアームポンプ　電動撹拌機
ダッシュクーラー　ウオーターカップ
スタンチョン
（カタログ進呈）

総代理店

三井物産株式会社

東芝電気／東芝商事

製造元　株式会社共栄精機製作所
本社工場　長野県須坂市亀住町１１５７
電話(須坂)１２３０—1・１４９０
営業部　東京都千代田区神田
佐久間町１—14（小串ビル）
電話(251)9602(291)8810・8816

繁栄と結びつく！

白痢鶏の絶無無菌の雛，抗病性のある種鶏群
中村は常にこの点を考え種鶏の交配，育種の
方法について研究し絶えず精進しつづけてい
ます

岐阜県岐阜市長良田中前１１
ＴＥＬ（岐阜）②0423　④7584
直営，育種研究所，蘇原町

株式会社　**中村養鶏孵化場**

―原稿募集―

編集部では〝ふじみの〟第四号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとする為にも、名誉会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いします。

記

〆切　三十九年一月末日

要項　○論文、随筆、紀行文、主張
　四〇〇字詰―十枚以内
　○写真カットは随意
　○表紙図案、三色以内、

宛名　東京都世田谷区世田谷四の四六〇
　東京農業大学畜産学科内畜友会
　ふじみの編集委員会行

発行日　昭和三十九年四月十日予定

応募原稿は一切お返し致しません

畜友会〝ふじみの〟
編集委員会
ＴＥＬ(420)五一七五（代）

ふじみの　第三号　目　次

巻頭言
卯歳　畜友会委員長　佐川輝男（1）
チクボーと自由貿易　畜産学科科長　平林忠（2）
茂原農場の移転と厚木総会農場の畜産施設及び実習について　日本配合飼料取締役研究場所　西川啓三郎（3）
石原太右衛門（4）

自営への道とその実態

養鶏業……千葉県　兼田みつ（旧戸井）（6）
養豚業……三重県　白石正（8）
肥育牛の生産にあたっての計画…三十八年卒　広瀬健次郎（11）
自営への道……畜二　小川徹也（12）
海外で知った美しい想い出二つ三つ……畜産学科主事育種研究室　鈴木正三（14）

紀行文

◆八丈島見聞録……畜四年　佐々木靖（18）
◆八ツ岳山麓「清里」……畜二年　坂根修（20）
◆北海道開拓酪農家での実習記……畜三年　栗原良雄（22）
◆東北へ……畜三年　岡田宏俊（24）

先輩からの寄稿

畜産学落第生……三十八年卒　滝川昌宏（27）
日々新……三十八年卒　高山昭夫（29）

想

食肉考……助教授畜産製造研究室　鬼原新之丞（34）
偶感……助教授畜産家診療所　平山常雄（34）
随想……教授・飼養学研究室　海塩義男（35）
「なせばなる」……講師繁殖学研究室　一戸健司（36）
畜産振興に託して……講師畜産経営学研究室　砂川泰夫（37）

随

家畜と畜産人……日本ホルスタイン登録協会　高橋正（37）
男の成長……畜四年　小野竹一（38）
落農日記抄……父兄群馬県　栗原正次（40）
民話と雑感……畜四　片山洋（41）
正直者は馬鹿をみる……畜四　森井正彦（44）
学歴の不平等……畜二　大賀四郎（45）
畜友会の飛躍的発展の為に……畜二　田中収（46）
研究室に思う……畜二　小野賢二（48）
貿易自由化恐るることなし……畜二　藤村和典（49）
動物か？植物か？……畜四　木田英宜（50）
農村よ若帰れ……畜四　J・A（51）
「数」……畜三　栗原良雄（52）
深川の鱗……畜三　遠藤光路（53）
清浄な美……畜三　三浦貞夫（55）
海……畜二　谷本克則（56）

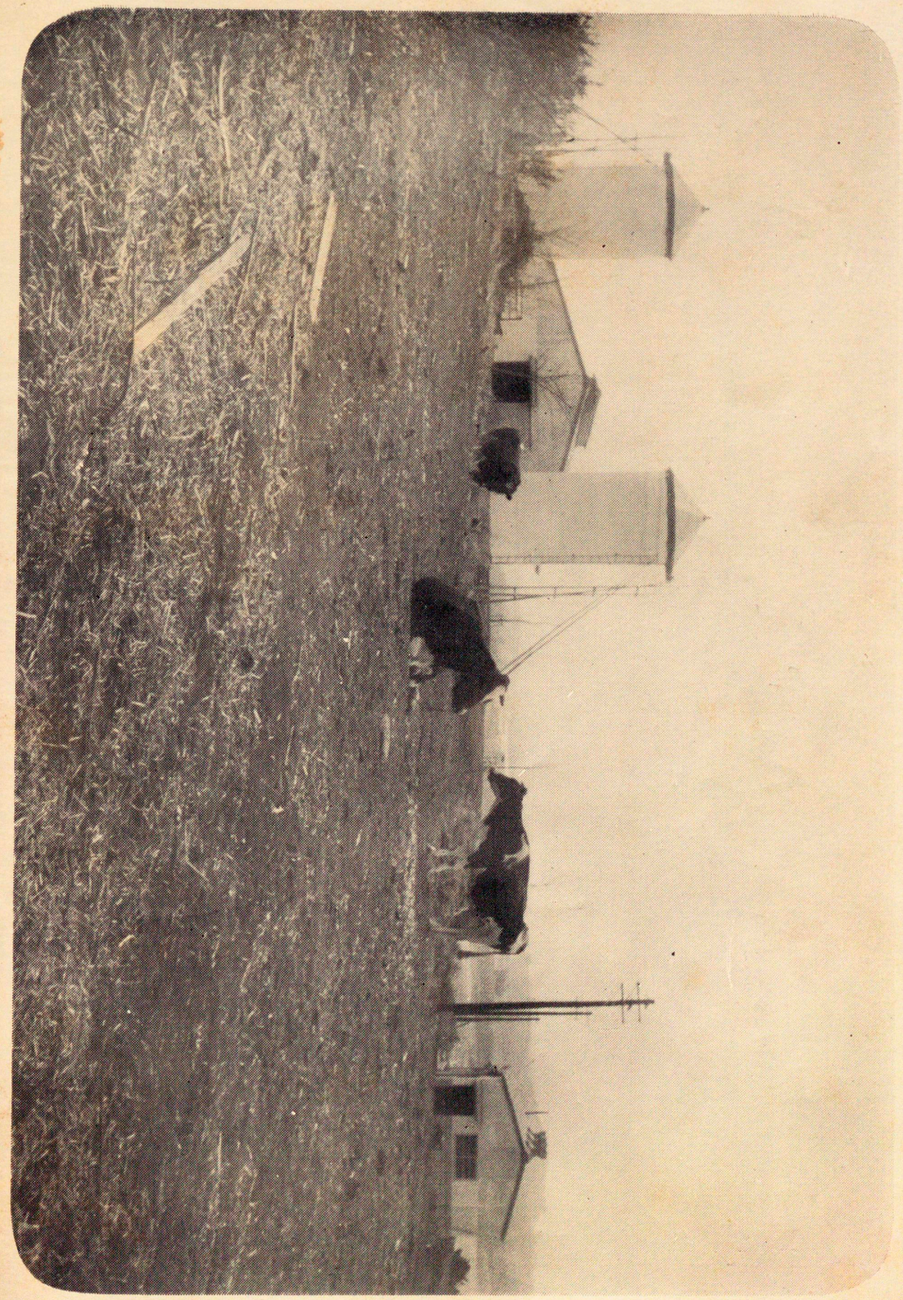
◇研究室便り◇

家畜繁殖学研究室……（58）
獣医学研究室……（58）
畜産製造学研究室……（59）
家畜飼養学研究室……（59）
家畜育種学研究室……（60）
畜産経営学研究室……（60）

論文

山羊及び家兎の母仔間における抗体の移行についての研究　昭和三十六年度優秀卒論　勝連紘一郎（61）
畜友会便り……（64）
畜友会規定……（65）
三十六年度卒論一覧表……（67）
特別会員住所録……（69）

東京農業大学畜産学科畜友会



（厚木農場）

巻頭言

畜友会委員長　佐川輝男

「ふじみの」の由来の茂原農場から厚木農場に移って二年、厚木農場も畜友会メンバーのホームグラウンドにふさわしく充実され、明日への大きな前進の為、私達を待っている。

この会誌も諸先輩の御指導により第三号を発行する運びとなり、誠に喜ばしいことと思います。

科学、技術の飛躍的な進歩の流れの中にあって、我々畜産人は、多くの英才が画一的な課程から独自の才能を開発し、創造的な才能を発揮され、各々が畜産学の水準を飛躍的に引上げることを切養希望する。

我々はこの目標の為、明日を力強く踏み出そうではないか、我々は微力ではあるが、畜友会の意義を常に座右に置き、相互の親睦を計り、交流を活発にし、現在の我々の立場をより認識することによって明日の畜産界に資することが責務であろう。

学園にあって、畜産人としての自覚を養い、社会にあっては自信と意欲と斗志を燃してまいしんしよう。

我々若いエネルギーとこの「ふじみの」を通じ発散させ、畜友会の趣意にそうよう心から願う次第である。

卯歳

畜産学科長
農学博士　平林　忠

ウサギの年を迎へ、産業界は跳躍するとの期待にみちみちている。

本学内藤学長は年頭の御挨拶に「農大は明治二十四年の卯歳に発足した、私も塚原事務局長も卯歳生れであると……三つ揃ったのだから天機があると暗示された。いならぶ職員の顔に明朗なほほえみが浮んだ。

ウサギがぴょんぴょんはねるのは特徴の一に算えられているが、その外にも色々な特徴をもっている。それをここで解説する余裕はないが、世間に伝えられているウサギに就いての事柄に大きい間違いがあるので、この機会に解説して認識を新にしておきたい。

その一、ウサギに水を与えると死ぬ。（生草を食べている時は渇きを覚えないだけで、水を与えたから死ぬというのは誤りである。水分の多い餌を食べると下痢しやすいということが誤り伝えられたものである）

その二、ノウサギを飼い訓したものが家兎である。（ノウサギとイエウサギは種が違うイエウサギの先祖はアナウサギである。

その三、ウサギの眼は赤い。（ウサギのうちでアルビノ「白子」だけが赤く見える眼をもっているので、多くのウサギの眼は黒褐色である。）

■名誉会員寄稿

チクボーと自由貿易

日本配合飼料KK取締役研究場長
農学博士　西川哲三郎

昨秋、仙台で日本万国家禽学会が開催されたとき、見学団に加わって、某水産会社の肉加工工場を見せて貰った。ソーセージといいプレスハムというからには、豚肉か、牛肉かが何割か配合してあるものとのみ思っていたが、何と、説明を聞くと、マグロ、サメ等の魚肉が主体で、これに鯨肉が加わるだけ、牛豚肉は薬ほどもはいっていない、もっともラードは若干エマルジョンになる程度には加えているそうである。あまりの意外さに「これが貴社のソーセージですか」と聞くと、「そうです、魚肉や鯨の臭気を抜くことと、ソーセージに似た風味や色を出すのに随分苦労したそうです」といかにも御自慢そうである。ぼくは、「ソーセージとは豚肉が主で、種類によって牛肉を使った肉加工品というのが社会通念だと思うが、これは所謂煉製品のチクワに類するもので、輪がないからチクワと言えないならば、「チクボー」とでもいった方が適当と思うが」と、幾分の皮肉を加えていった。彼氏あわてて、「勿論うちでは必らず魚肉ソーセージといっています」と訂正した。

抑もソーセージの語源は牝豚"Sow"と香辛料の"Sage"とから出来た言葉で、豚の屑肉、肉臓、皮膚等々を遺憾なく利用するように発明され、発達して今日に及んだ食品である。「チクボー」をソーセージといっても恐らく外国には通用いたしますまい。

昨夏は、市乳の消費が予想を裏切って減少した。その後も余り延びずに酪農関係者をあわてさせ、原乳価格の引下げで大問題になっている。朝などホームの牛乳売場を見ると、愛飲者は決して以前よりは減っていない。ところが、ケースの中を覗くと、黄色やら淡紅色やらの、牛乳にあらざる「乳製品」の方が多く、牛乳はすぐ売切れて、やむなくこのフルーツ牛乳と称する素物を飲まされる。こうした牛乳にあらざる乳製飲料が、巾をきかせて牛乳の消費を駆逐しているのである。それば かりか、酪農会社の中には、ジュースを牛乳並に毎朝各戸に配達している所さえある。牛乳よりは脱脂乳に香りと色をつけたフルーツ牛乳や、ジュースの方が利益は多いであろう、が、酪農会社が本業の牛乳のライバルを、わざわざ自らの手で売るという感覚は、一体どういうことであろうか。

以上のようなことをなぜここに取上げたか

というと、近い将来、あらゆる畜産生産物が自由貿易になるであろうからである。外国からほんものの美味なハム、ソーセージがどしどし輸入されたら味覚の特に発達した日本人だ、価格のことは忘れて、味だけを云々して外国品を讃美し愛用するに至るであろう。

ぼくは、国産愛用論者では人後に落ちないと自負しているが、チーズだけは、本場のエダム、ゴーダ、カマンベル等を無理しても買っている。同一名で出している国産品などは似て非なるものだと思っている。自由貿易になってこれ等世界中の逸品が潮の如くに舶来したら、我酪農界はどうなるだろう。せめて輸送困難の飲用乳だけでも今のうちに延ばすだけ延ばしておかねば酪農農家ばかりでなく酪農会社自身がひどい目に会うに違いない。

既にアメリカ第一の肉製品会社が我国に進出する風評がある。味に於て、栄養価に於て「チクボー」がソーセージの敵でないことはわかり切っている。酪農会社が目先の利益のために、ジュース屋の片棒をかつぐようなことは、我国畜産業のためにやめてもらいたい。

茂原農場の移転と厚木総合農場の畜産施設及び実習について

石原太右衛門

茂原農場の移転

久しく懸案となっていた。茂原農場の移転も、漸く客手十二月中旬完了した。

移転に際し、関係者一同は随分苦慮した。

それは分校の敷地が茂原市に売却され、市営住宅建設のため、一日も早く立退きを余儀なされていたこと、一面受入態勢が不充分で家畜の管理が心配されていたこと、更に年末を控え、輸送が懸念されていたことなどである。天候不順のため建築工事は予定より遅れ、輸送は漸次窮屈となり、立退は迫る、この悪条件のもとで、どうして無事な引越しができるだろうか。一同の心痛は、日増しに深まるばかりであった。

家畜の中でも特に懸念されたものは、搾乳牛であった。万一の場合に備え、野外搾乳の準備まで整えた。その苦労たるや、全く言語に絶するものがあった。

斯様に不安な状態のもとで、十一月下旬から輸送計画に基き、十数台のトラックで器具、機械、汁器動物等、ぽっぽっ輸送し、最後

は十二月十三日、昨年の夏期実習に於て、大型サイロに詰込まれたサイレージまで計画通り万事滞りなく、輸送を終了したのである。

幸い十二月に入ってから、天候に恵まれ、随分心配された農場の移転も、何等の事故もなく、無事終了したことは、関係者一同の誠意が天に通じたか、全く天運としか思われない。私共は衷心から天に対し、感謝せざるを得なかったのである。

厚木農場の畜産施設

さて厚木農場の畜産施設であるが、先ず第一次計画として、搾乳牛二〇頭繋養し得る近代的牛舎一棟（三〇坪）、事務兼飼料倉庫に種牝牛繋養の特別建物一棟（三〇坪）と、大型サイロニ基（直経一〇尺深さ二〇尺）及び種豚舎一棟（五四坪運動場付）、肉豚舎二棟（一棟二〇坪）と、採卵鶏舎一棟（鉄骨ケージ鶏舎三五坪六七〇羽収容）、孵卵育雛舎一棟（四五・五坪）等が年度末までに建設されるが、更に乳牛追込舎（分娩室を含む）一棟、緬山羊舎一棟、種豚放牧場、種鶏舎一棟、大雛バタリー種鶏放飼場等が、第二次計画として考慮されている。

畜産実習

かって茂原農場に於て、実施された畜産実習について、実習生からその感想を聞いてみると、建物が古い、家畜が少い、もっと時代に即応した近代的の設備と、多くの家畜を飼ってほしいということが、大部分の強い要望であった。その要望に応ずるべく関係者一同は大いに努力しているが、何分近年学生が急速に増加したので、全部の学生が満足し得るような施設は、今後の雖、容易ではなかろう。又大学の実習だからといって、特に新しいことばかりあるわけではない。一般に知られていること、行われていることでも、実際に自分でそれをやってみて、その技術を身につけることが、極めて重要なことである。従って基本的ないろいろの問題を取上げ、それを全体の学生に実際にやらせることが望ましいのであるが、畜産の実習となる、材料が不足して、いつも充分その指導ができないのを、残念に思っている。よって足りないところは、休暇を大いに利用して自分が将来進みたいと思う途に向って、適当と思われる牧場でみっちり実習を行い、充分腕を磨き実社会に出て直ちに役立つ立派な人間となって貰いたい。

机上で学ぶ学理も勿論必要であるが学理ばかりでなく、特に農大生にとっては農業技術を実施に学び、それを身につけてこそ実社会に出て生きる途だと固く信じている。

この意味に於て私共農場実習にたずさわる者の使命もまた重大であることを痛感する。厚木農場は総合農場であるから、従来畜産実習のみにたずさわってきた私共も来年度からは、他学科の畜産実習指導にも、従事することとなった。勿論他学科の学生と雖、畜産学科の学生を指導すると同じ気持をもって畜産技術の普及に、努めなければならない。今や日本農業は一大転換を余儀なくされている。農業構造改善上極めて重大な使命をもっている畜産を、今後一層伸ばすためにも、農場実習を通じて大いに頑張りたいと思っている。

☆　☆　☆

自営への道とその実態

「現在農村に於てその主要な労働力となるべき青年が農業をはなれていく傾向にあるにもかかわらず逆に、その道へ大きな夢と希望にもえて進む人々がいることは喜ばしい次第である。ここにその人々から送られた、自営への道とその実態を載せた。」

養鶏業

千葉県　兼田　みつ（旧戸井）

昭和三十四年の春、私は農大卒業と同時に、養鶏自営への道を志して、当初一三〇羽の餌付を皮切りに奮心養鶏をスタートしました。当時私の目標として五年計画一〇〇〇羽の羽数確保ということを重点的に考え、石の上にも三年のたとえを肝に年毎にその計画を全うして来たのでありますが、四年後の今日、その歩んで来た道を振り返って見ますと全々予測以上のけわしい道でありました。それと言うのも私の自立養鶏出発に際して、私には全く資本と言うものがなかったし、従ってまた将来増羽を見込んでのそれに見合う広い土地の確保と言うことも出来ませんでした。

卒業の年の秋には、手製の箱型育雛器で育てた一三〇羽の鶏が一せいに産卵を開始し、然もその時の卵価相場はkg当り二七〇円という高相場で、私ははずむ心を抑えながら、一方では不安な気持で、始めて近くの肉屋さんへ交渉し、生産物の取引契約を結びました。

それから毎日生産された卵はその肉屋さんへ新聞相場の仲値で卸し、一応当時は生活の資として暮しには事欠くことがなかったのですが、一体この一三〇羽の鶏を元手にして更に増羽の態勢に持って

行くにはどうしたら良いか。一方ではその小羽数の利益を生活の資に当てねばならないし、他方その利益を増羽の資金として充当して行かねばならない。当時の一三〇羽の経済価値が少くとも現在以上に高かったことは事実ですが、然しそれにしてもその利益の中から増羽して行くと言うことはとても至難の業であり、そればかりに頼っていたのではとても進歩発展を望むことは出来ません。

当時、日本の農業はそろそろ転換期或いは曲り角とする風潮が強く、農業者自体にも、この辺で自分の農業の在り方、行き方というものを修正改善して行かねばならないという自覚認識が高まりつつある時で、私の近辺の農業者の間にも、一般水準並みの所得という声が次第に強まり、畜産導入による所得向上を真剣に考える向が強くなって居りました。そうした中で、私のところへ中雛があったら分けてもらいたいと言う人がぽつぽつあらわれ中に数百羽まとめて欲しいと言う人も出て来ました。その年の暮、私は思い切って中雛仕立に踏み切ることにしたのです。中雛仕立てと言っても資本のない私には雛から飼料から育雛設備に至るまで、一切販売完了後の支払いと言う信用貸借の条件が必要であり、そのため私は先づ二〇〇〇羽育成の計画案を作成、ヒナは先輩に、飼料は出入りのS飼料会社特約店の方に、各々自分の計画を説明し、その意向を求めましたところ、両方から快諾の返事を手にすることが出来ました。

私は早速積重ね式自温バタリー育雛器及び中雛バタリー各五〇〇羽分を手製で製作、三十五年一月の末第一回育雛五〇〇羽を始めに、二、三、四月の四回に分けて計二〇〇〇羽の育雛を行ない、然も四十日に仕上った中雛は一羽残らず売却することが出来ました。その時の利益で新たに二五〇羽の増羽分を餌付し、また三坪の極めて簡単な育雛舎を建てることに成功しました。

また六月S飼料会社の特約店の方が、中雛販売も成功裡に終ったのだから、この際思い切ってブロイラーを少しやって見ては何うかという話を持って来ました。聞くところによると、その特約店の中に最近ブロイラー組合が設置されており、その組合を通して毎月数回にわたり市場へ出荷しているということが分りました。たまたま私は今度仕上がる二五〇羽の採卵鶏の収容バタリーをどうして建てようかと思案していた矢先丈に、この話は私の関心事でもあり、早速検討することにしたのです。

私はブロイラー出荷後に於いて飼料費を清算するという相方の話し合いの下に、ブロイラー生産に着手することにしました。一方七月早々近くの材木屋へ交渉し、数回にわたって月賦で材木代を支払うという話し合いの下に、三五〇羽分の簡易成鶏バタリーを建て、その中に雌大雛二五〇羽を収容すると同時に、空席で毎月三〇〇羽から四〇〇羽のブロイラー生産を始めました。この材木代というのも月々ブロイラーから挙がる収入によって支払う計画であり、それだけに私自身も真剣でした。然しこのブロイラー生産も、毎月の出荷羽数は少なかったけれど、その後の私の経営面に大きくプラスされて来たのは事実です。

その秋、私は三五〇羽の採卵鶏を持つことが出来、一方ブロイラー生産によって、材木代の大半を返済することが出来たのです。お得意もまた一軒二軒と増えて来ました。何分小規模から自力で一歩一歩増羽して行かねばならないのですから、生産物の販売は出来る大有利に、然も飼料コストは最も安くということが前進する為の手近な前提条件であり、そのため採卵鶏は全部、ブロイラーに於いて

も半分は自家配合を行ない、一方緑餌の多給、生魚屑の契約回収に努めました。

十月に補充鶏として五〇羽餌付しました。こうして羽数も少しづつ増えるにつれて、設備は増設必然的に伴って来ます。ブロイラー生産の見通しもついた翌三十六年一月、生産能率の合理化から、ブロイラーは採卵鶏と全く切り離して管理する必要性を感じ、前同様、材木屋と話し合いの結果、月賦返済ということで、ブロイラー兼大雛バタリーを五〇〇羽分新築しました。この返済にもブロイラー生産が大きな役割を演じ、中雛仕立と共に採卵鶏増羽の大きな推進力となったのです。この年も二、三、四月にわたって、一五〇〇羽の中雛仕立を行ないました。そして採卵鶏六〇〇羽を目標として三五〇羽の餌付をしたのです。七月にはまた新たにケージ鶏舎三一二羽分と増設することが出来ました。

こうして三十七年度九〇〇羽三十八年度は一二〇〇羽に増羽され、一応四年間で一〇〇〇羽養鶏確立の夢が実現されたわけです。

養豚業

三重県　白石　正

いささか古い話で恐縮ですが、種豚の基地作りをして農村に肥育を普及しその原料を確保し食肉加工の安定経営に踏み切るという理想でありました。それは十年近くも以前の計画で養豚は昭和三十二年に操業し、昭和三十八年度の事業計画は仔豚生産七五〇、肉豚一、二〇〇が現況であります。一貫した方針は、年間の生産規模の拡大を五割前後とし可及的堅実経営であります。

私の経験から卒直に経営について触れて見ます。

一、固定及流動資金

今では肉屋、乾物屋、八百屋、酒屋等合わせて十軒の常得意を持つようになり、然も取引きは一切現金を建前としてやっております。副産物である鶏糞は蔬菜組合、果樹園、肥糧店、近辺農家等からの引合いが多く、主産物である鶏糞と共に何時も供給が間に合わないという嬉しい悲鳴の連続となっております。廃鶏は町の鳥屋さんが五日に一度位見廻りに来て、羽当り一九〇円位で持って行き、註文があればと体処理して註文に応ずるようにしております。

今出発当時を振返って見ますと、感無量の心境ですが、然しここでその一〇〇〇羽養鶏の前に立って静かに考えて見ますと、その四年間の日本の経済情勢は大きな変貌を見せ、畜産界に於いても、その経済情勢の変貌と相俟って次第に企業化し機械化生産方式の採択と共に、それに伴う新技術、新経営法が要求される様になって居ります。私はここで自分の新しい希望として、今後は新時代に即した方向へと邁進して行きたいと思っております。

近頃、近代化された木造建築、ビル等を見慣れている感覚から豚舎等の固定資金はややもするとそう負担を感じないと思われるが、専業養豚では丈夫な合理的な豚舎を必要とし、予想に反した設備資金を余儀なくされるのであります。流動資金も年間二、三回の低い流動性より相当額を要するのです。

二、安定性を欠き投機的性格

端的には、仔豚及枝肉価格の激しい変動です。経営に最も支配力の強い枝肉価格、生産コストの内、飼料費の次に占める割合の多い仔豚価格、この両者が絶えず大きく変動する、そしてこれが赤字と黒字経営の決定的因子として働くのです。要は、他産業に於ても同様であるのですが、如何にも極端である処に問題があるのです。価格安定政策及需要の増加等より若干この傾向は提正されつつありますが、世界的現象であると聞いて居ります。この抜本的対策は、他の経営上の問題点より解決する他ないでしょう。

三、低収益性

損失と高利の変動を長期的に見ても矢張り低収益性である事に変りはありません。農林省の調査等で他の農業部門との比較が実態調査で明かにされて居りますが、昨今来日のスエーデン技師も自国の低収益性を発表して居り、いわば豚の特性上世界的にも共通の問題があるのではないかと察せられます。

例えば高収益の場合は仔豚価格及飼料費が比較的安定し、且つ枝肉価格の高い時、或は、枝肉価格がリードして高くなりつつある段階でしょう。その逆の場合は非採算価格で枝肉価格が低迷する場合か或は高い仔豚や飼料を使って枝肉価格がどんどん下って行く時です。特にこの場合の後者に於て、比較的枝肉価格が良いにもかわらかず損失を招来する養豚経営の大きな欠陥があるのです。

四、自己資金と借入資金

協業経営、企業養豚に在っては、その投下資本の七、八割を借入に依存して居る場合が非常に多いと聞いています。既にお判りの如く逆に自己資本でその大半をまかない不足金を借入に仰ぐ方法で始めないと全くとんでもない事になります。安易に近代化資金の融資があるから等考えず、これらの資金は一応の基礎が完成し拡張の段階で経営規模に合った融資を受ける順序でなければなりません。

金利だって収益性が低く馬鹿になりません。これらは商売なり事業経営の鉄則に他なりません。

五、立地条件

これから養豚を始めようとされる方は、実際有利に経営出来る場所の選択が第一であります。他産業に於ても港の有無、道路、人的資源、土地の価格、関連産業の遠近等多くの条件を必要とすると同じく養豚でも極めて重要であります。やって見て判る事ですが生産コストに販売経費等痛感される処大でありましょう。尚且つ立地条件が有利な場所でない場合は、卒直に私はおやりにならぬ事をお奨めします。更に、良い場所の選定が終れば次に、その位置に於て如何なる方法で経営をする事が少しでも利益につながるのであろうかという具体的な計画の段階に入ります。

養鶏等は画一的方法で経営が行われて来ている様子ですが養豚は誠に種々雑多で、この様な方法が何処の場合でも必ず有利であるとの方法はないと言える程でしょう、飼料一つ見ても都市近郊なら残飯、或は甘藷、澱粉粕等の有無、自給飼料の可能性等があり、それに依って豚舎の構造、調理場の設備、飼料計算組合せ、其の他沢山

の関連性が極めて大です。販売にしても自力の販売から九州等の如く、一頭当りの経費に一、〇〇〇円も、一、五〇〇円もとられる場合では話になりません。

勿論、仔豚の導入にしてもよいものを安く、安定価格で相当量を購入する等より目標に近い能力の仔豚市場の距離も勘案せねばならぬでしょう。私はこの項目に関して最も重要と考えます。

六、模倣養豚はいけない

前項の如く決して他の真似でなく、立地条件に合った最も有利な経営上の諸問題を自らの努力で作り上げて行く事です。

一般的には小中規模では特にこの傾向が強く大規模化に伴って除々に近代化された統一的方法に頼らなければならないでしょう。

七、防疫対策

生物相手の仕事は予期せざる災難を受ける場合が多く且つ之が不用意の時は経営の進退に迄及ぼすが如き致命傷ともなります。

私も昨年の豚価暴落時に伝染性胃腸炎の発生で、七〇～八〇万円近い被害を受けるという苦い経験をしました。豚コレラと並んで豚の二大伝染病であります。

胃腸炎には予防注射もなく治療の特効薬もありません。

コレラは予防注射済みの発生もしばしばある状況です。経営上最も要注意が防疫対策であります。或は伝染病と普通の病気の見分けのつかぬ疾病もあり、混合感染もあります。従つて予防注射の励行、定期豚舎消毒、導入仔豚の一時的隔離、人体車体の消毒等徹底して防疫をせねばなりません。

八、多角経営

経営規模が大になれば立地条件にも依るが食肉の直売其の他の方法で養豚を安定化させ収益性の維持向上を計る事が当然の課題となって来るでしょう。今後の養豚経営も変って行く事でしょう。流通機構も改善されるでしょう。需要も量的増加、或は質的にも形の上でも変って行くでしょう。この様な状勢の変化をよく見極めて多角化へと進む事だと考えます。

九、将来について

現在明かにされている処は需要が相当に伸びて行く事、政府の養豚奨励の政策が強い事、この二点が国内的問題で次に自由化による国際競走力如何という事でしょう。

近年の畜産奨励は世界第二次大戦と酷似し、兎に角養豚だ、養鶏だと盛に声を強くし、あげくの果は価格が暴落する、戦争には完敗したと同じであります。安定政策もその効果は長期に見なければ判断出来ません。但し家畜改良増殖目標にある昭和四六年に豚の飼育頭数を七四〇万頭に増加する事は難しくないでしょう。需要も年間三割増加は今後当分見込めるでしょう。

この間に在って養豚の収益性は依然として、過去と著しく異る事はないと見通されましょう。しかも来秋位からは貿易の自由化は一段と拡大され農産物についても余儀なくされる動きにあります。従って前途は必ずしも明るくなく、ともすれば生産者は高く売る事に終始しがちなものですが、目標をコスト引下げに、一貫するの他ありません。

十　結び

悲観的材料が多く、説明体験発表に終りましたが、私自身は希望的要素も含まれて居りますが楽観的に明日の仕事をそして将来の計画を立てて居ります。

肥育牛の生産にあたつての計画

三十八年卒　広　瀬　健　次　郎

小生が本学畜産学科に入って来たのは、西部劇に出て来る広大な牧場と、多くの牛の群をなす光景を夢見て来たのが大きな原因といえる。小さい時は、農村指導者になる事を夢見、農村の共同生活の実現へ夢中で考えたものである。現在では社会全体的な事よりも自己中心へと考えが移動して来た。それは大きな牧場を持って牛を多数飼育する事である。事業を起すには大くの資本がいる。まして土地山林を持たないものには、なおの事である。資本がないものは、なんらかの形でこれを作らなくてはならない。そこで考えついたのが、派米農業労務者である。これは、一年と三年があるが、一年間では、米国の農業を見、体験する以外に資本的にはまったく無関係と考えられる。そこで、三年間という事になる。これで行くと、三年間で約百万円の資金が出来る。帰国後はこれを資本として小さな事は出来る。例えば、養鶏養豚等である。

これにより数年後にしてその資本を大きくして、牧場を持つ事が出来る。この牧場とは、公有林を借入して、ホルスタインの雄仔牛を肥育する事が出来る。

この牧場とは、公有林を借入してホルスタインの雄仔牛を肥育する事であって、現在ホルスタイン種の雄仔牛は生後一週間ほどでほとんど、屠殺されてしまう。ところが将来、日本の食生活の改善にしたがい、多くの肉が消費される。しかし、価格が現在のまま、もしくは値上りをしたならば、その上昇は非常に少ないものとなる。多くの人は、高級牛肉を多量に食する事は出来ない。高級高価な肉を少量食べるよりも廉価な肉を多量とる事を望むだろう。しかし、いつまでも生産方法が現在のままであったなら、それを望むことは出来ない。又食肉は現在需要に足りないと言われ、又その生産性が低いと言われて、畜産界では、豚における新品種を入れ、かつ牛においても、肉牛を入れる事を計画しているという。これらは長い目で見たら、その需要をみたす事が出来る様になるかも知れない。しかし、多額の費用を要し、又多くの危険をふくんだものであり、十分な期待が出来ない、そこで考えられる事は、現在ある家畜を利用する事になる。ここに出るのがホルスタインの雄牛である。前述したごとく、その数は非常に多数であり、これが十分な活用されていない状態である。これを約十八ケ月から二十ケ月肥育したならば、約四百瓩のものとなる。この肉質は、他に比較してさほどおとるものではなく、人々の食膳にのぼるに決して、不十分なものではない、しかしこれを現在の牛の様に肥育したならば、その経費は莫大なものとなり、その生産性が高いものとは言えない。現在、日本には十分利用されていない山林が全土の多数を占めている。そこでこの土

地を利用する事が考えられる。元来草食獣である牛は、優良な草が十分あれば、これだけで発育は順調にする。そしてまるまると肥えたものとなる。四月から十月までを飼料のすべてを牧草及び野草に依存し、残りの月を、サイレージ乾草そして若干の濃厚飼料でまかなったならば、肉生産にもちいる経費の大部分をしめる。飼料化は大はばな減少を見る事が出来る。又人件費を夏期における完全放牧により、牛そのものにかかるものは、最少限にとどめる事が出来る。四月より始めてよく年の九月に肥育を完了したならば、これを十分に見込む事が出来る。この事により、総経費の減少により、牛の価格が安くとも十分に採算の合うものとなる。又畑地に比し、山林は大面積を利用する事が出来、牛には若干の傾斜地は、なんら苦にならない、ここに多数飼育が可能となってきて、多数飼育の有利性が十分に発揮出来るものである。

自営への道

畜二　小川徹也

私の家を簡単に説明致しますと、神奈川県某市で養鶏孵化業を営んでおります。父がこの道に入りまして早くも十四年を過してまいりました、がその間私も及ばずながらも手助けをしてそのつど覚えてきました事に基き綴ってまいります。自分が体験して来た所によりますと『自営』ということがこれ程にも難しいものかと今更にも感嘆する次第であります。ではこの自営という言葉でありますが、この中には次の三つの事が一応含まれていると思います。第一に『資金と資本の問題』第二に『経営についての問題』そして最後に『実際技術の問題』等が挙げられるのであります。では順を追て綴ってみましょう。まず初めに『資金と資本の問題』でありますが、ここで農業（水田耕作）と養鶏とについて比較してみますと、水田を初めるにしろ、養鶏をやるにしろ土地が必要となりましょう。仮りに一反の地代が三十万円であったとしよう。これを元手にして初めるのでありますが、経費が売上即ち収穫高の三十％程かかると思われ、これは水田と同様養鶏も三十％程度かかる様であります。そのほか鶏の場合一羽を育成するのに一千円の投下資金がかかるのであります。鶏を飼養の場合一反に三千羽の飼養は可能であります。ここで鶏の育成及び設備とは三百三十万円となるがこれは一応この程度にしておきましょう。一反当りの水田からは、十俵の米が取れるとし、これを一俵五千円で売った場合五十万円の粗収入となりましょう。そして利益率は約十一％となる。では鶏の場合年間百五十万円の収入があるがその間の手間や諸経費で四十五万円を差し引かねばなりません。すると利益は百五万円となり、資本金三百三十万円から割り出して利益率は三十五％弱となろう。

以上の様な事からしても、たとえ養鶏に資本をかけても水田耕作と比較した場合利益率に於て二十四％の違いが出ます。投下資本に対しこの様な高度な利回りは農業中屈指のものと言えましょう。その他土地の高率利回り度の問題や労賃の点よりしても同様効率的事業と言うことが出来ます。現在有畜農家に対し、『近代化資金融資制度』或は『増殖資金融資制度』等々というものが国家の奨励或は県の奨励となって表われております。これは例を記して説明するならば、ある農家で土地はあるのだが家畜商売をやりたくとも資金がないのでだめだ、などと言う場合利用するのであって、資金はこの制度から借りて、ある一定の期間をもって返済すればよいのであります。こんな有利な制度はまたとないので、これらはおおいに利用すべきでありましょう。特に我々若人が自営態勢に入る場合、上記資金を有効に利用することにより事業の基盤を築くことが出来ましょう。次に『経営についての問題』でありますが、一応考えられる事は収支の合理化を計る事によってより収益性の高い有畜農業として、近代産業のグループに加入することが出来ると思います。先ず収入の分析をしてみましょう。この構成要素としては、卵の売上げ廃鶏、鶏糞の売上に大別する事が出来ます。この三要素を個々に取扱う事により、労働時間の制約を受け一人で五百から、一千羽位の経営に終始することになる。現在の大多数の副業、又は、正業養鶏家は労働を無視してかかる処に大きい欠陥を生じ、一人数千羽の共同化養鶏をやる企業家に、立ちうちする事が出来ないわけであります。一日の養鶏労働時間の十分の四を占める、鶏糞処理などは当然消略し、拾損すべきものと考えられます。その意味から現在流行のケージ等も、一羽一羽の籠の中に、生棲する鶏に一羽一羽、然も一日数回にわたり餌をやるに至っては、言語同断と考えられます。もう少し合理的な、給餌方法が考えられましょう。

又卵を売上げる度にガソリンを使い、時間を用いて果して何の位高く売れるでしょうか。次に支出の面を分析してみましょう。支出には餌代、ヒナ代、薬品代、其の他の消却費等を挙る事が出来ます。餌もヒナも支出は最少限度に、止める事は当然でありますが、安もの買いのゼニ失いでは困ります。

この場合も常に労働力、時間の軽減に意を用いて、日曜日は人間並に休養を取る効率形式を打ち立てて、運営出来ると思われます。そこで第三の問題即ち、『技術についての問題』でありますが、これは当然技術的向上が、要求されてまいります。今後学校において学ぶ、生理学、育種学、発生学等々に私達若人の、自立経営を志す者にとって、愈々重要性を帯びて参ります。経験を過当評価された過去の時代には、アホーの鶏飼いと言われ軽蔑されて来ましたが、今後の産業の一環として養鶏は当然他産業と同様、企業への発展を要求されなければなりませんし、この可能性を信じてこそ自営を志す次第であります。

海外で知つた美しい想い出二つ三つ

畜産学科主事
育種学研究室　鈴　木　正　三

追悼と変ったうるわしい想い出

オーストラリアのシドニーにおける、第十二回万国家禽会議でも、ユーゴースラビヤのリューブリアーナーにおける、第八回家畜血液型会議でもきまって、その日その日のスケジュールが終了すると、国際親善を計った各種のレセプションやパーティーが、盛大に行われた。そしてそこには文字通り政治色、区別感から離脱した和やかな、学問真理を追求するもののみに、与えられる友情がお互に、遠来の学友えの信頼と、敬慕とになって、国際間の垣絶ち切り席上各所に、美しい花が咲き乱れ、爆笑と拍手のざわめきとなって、心からなる親善の夜の更けるのを知らなかったことも幾日かあった。これは確かに国際学会に対する、主催者や開催国の細心なエンターテーメントの結果からでもあろうが、特にその内容が、学術会議であるため、余り他に見ないまざり気ない、明朗な国際会議であるからであろう。他の色々な種類の国際会議の様子を聞くが、それ相当に、それぞれ複雑感をかもす会議となり、儀礼的パーテーにはそれほど腹の底から笑って握手はできないと聞く。何れがよいかは別として、兎に角学問する者の集りは案外簡単に結ばれて、それが深い友情えと発展して行く。

家畜血液型会議の開催地、リューブリアーナーはユーゴースラビヤの、西部山岳地帯の街、イタリーのトリエステまで自動車で約一時間とか。静かな古い文化の都である。筆者はこの地に着たのは、昨年の現地時間八月一九日午後七時、何しろ前日の正午に真冬のシドニーを発って真夏のカイロ、アテネを経ての三〇時間以上の飛行旅には、いささか気苦労も手伝って疲れ切っていた。こんな姿でただ一人、西も東も分らないリューブリアーナー空港に降り立った時、花束をかかえた小学生のお嬢さんが、父 Dr Böhm に連れられて出迎えてくれたのは、まずリューブリアーナーにおける、嬉しい第一の印象であった。Dr Böhm はこの国の獣疫研究所の主任官である。それから翌十九日の日曜には Dr Böhm とオスロー大学 Dr Brand とでリュービリアーナーから60㎞離れた山の中のブリードの湖にドライブし、第二のスイスといわれる、美しい風景を楽しんで一日を過した。このブリード湖についた時、東京の練馬の(練)字のバックナンバーをつけた小型の、自動車二台が路傍に並んで置いてあり、その側面のドアーに日の丸の旗とユーゴーの国旗が画かれてあり、誰も乗っていない。日本人とも会ったことのないこんな国

の果てに、同胞の存在を確信し、早速この湖畔にある博物館に入ったところ、早大大学院の学生四名と六〇才を越えたと思われる、日本婦人一人に出会った。お互に奇遇を喜び懐しく思い、暫時お互の行動を語り会ったところ、学生達は日本、ユーゴーの親善自動車旅行に来た由、老婦人は四〇年来リューブリアーナーに住みついている、この土地唯一の日本婦人。そのたどたどしい日本語から推して、確かに日本を離れて長い間海外生活をしている人だと直感した。そしてこの学生達は、次の予定のため再会不可能を伝え、彼女はリューブリアーナーにおける、再会を約束して互に別れた。

筆者は家畜血液型会議終了後、彼女の家に招かれた。彼女はシェクセンク近藤と称し、昔の日本名は近藤常子という。近藤女史はまず、筆者の訪門を心から喜んでくれ忘れかけた日本語で、忘れかけた日本料理を自ら作って歓待してくれた。そして静かに自分の身の上話、自分の人生行路のあらましについて説明してくれた。

女史は岐阜県高山市郊外の農村の出身、四〇数年前、支那の上海において当時ユーゴースラビヤの海軍中尉である。ユーゴースラビヤ人である夫と結婚し、北京、青島、上海各地で生活し、その後夫は中将に栄進しユーゴーに帰り、リューブリアーナーに落着いた。終戦の翌年の昭和二一年夫は病死し、続いて二人あった男の子供達もつぎつぎに斃れ、現在は女史一人の天涯孤独の生活である。広い二室のアパート住まい、その部屋はどこも支那時代に求められたという支那の美術品、調度品で一様で足の踏むところもない仕末である。そして女史の生活費は、亡夫の年金とこの調度品をユーゴーの国に寄贈し、一九六三年の今春四月に落成する予定の東洋美術館に納められた。その見返りにユーゴー政府は、女史の一生涯を保証することになっている、というこの二つによって、余生を送っているとのことである。そして筆者の訪れた時もリューブリアーナー大学医学部の、大学院学生三名に熱心に、日本語を教えておられた。学生達は来年には日本に留学するとのこと。そして筆者の女史に対する、何かの希望の有無についての質問に対し、何も希望はないか、ただ一九六四年の東京オリンピックに、ユーゴーの選手の日本語通訳官として自分の人生最後の故国日本の土を踏み、その折に高山の故郷の先祖のお墓参りをしたいだけと、つくどく語っていた。そして語調を強くして、第二次世界大戦の際に国籍はユーゴー国であるが日本の血の流れている女の受けた苦痛、悲哀を語っていた。

兎に角、ユーゴーを訪れる、日本人は皆女史のお世話になるとか。かってローマオリンピックの日本の体操選手も、日本への帰途、トリエステより、リューブリアーナーに立寄りこの都市で模範演技を行ったとか、この時の写真を見せて頂いた。そして女史の部屋の大きいサイン帳にはこの家を訪れる色々の人の名前が記されている。筆者も女史の余生の安泰を祈念して、一筆ものして置いた。

ところが去る一月二七日の朝日新聞の夕刊は女史の冥 去を報じた。筆者と余り突然のことで、ただ驚くばかり、遠くはなれた国のこと何んとも致しようもなく、ただただ女史の冥福を祈るのみである。兎に角、筆者は昨秋帰国後、女史に手紙で連絡をとり、一九六四年東京オリンピックの節、是非来朝されることを、一日千秋の思いで待ち、このことが実現できるように、在ベオグラード日本大使館の高橋大使にも会った時、懇願して置いた矢先のことである。前述の通り女史の嫁入の道具に持参した五〇〇点以上の、高価な支那

の骨董品、家具類を一切寄贈して今春東洋美術館開設の寸前でもある。誠に惜しいことである。一人淋しく異国で死んで行った女史が、筆者がリューブリアーナー空港を出発する時、午前五時に筆者のホテルまで来て、爾後の旅の安全を祈ってくれた。そして余り早かったのでホテルの冷蔵庫に預けた血清類を取り忘れ、その後態々飛行便でベオグラードの筆者に送ってくれた。その包みの中にはスロベニヤの風俗人形が二個入っていた。老女史の日本婦人としての優しい心が伺われて幾度となく御礼言つたのもつい先日のことである。この人形が筆者の世界旅行中無事にケースに納められ、今もなおそのままの姿で健在である。この人形と共に近藤女史の温情は生きており、海外での美しい日本婦人の活躍は有難く偲ばれる。兎に角、女史は日本とユーゴー国との親善のために一生を捧げた人で、いわば日本婦人の国際功労者とでも讃えたい。静かに冥福を重ねて祈るのみである。

友情は深く更け行く夜と共に、

九月一四日正午ミュンヘンの国立家畜血液型研究所主催筆者歓迎昼食会を開催したい旨の連絡が同研究所からあった。会場はミュンヘンの中心地のあるレストランで出席者の主な顔ぶれは、この研究所長の Prof Dr. Düoowaechter それに Dr Mengel, Dr Buschmann Dr. Schmit 及び研究主任官の Dr Richter で、あとは色々紹介されたが判らない。まず Prof Düoowaechter は筆者の来訪を喜び、日本とドイツの過去における同じ運命を共にしたことに触れ、血液型研究は今後互に連絡をとって続けることを望むと挨拶し、自分の著書である「ドイツにおける家畜の育種研究」を一部贈呈してくれた。そしてなごやかなミュンヘンビールとドイツ料理の御馳走で午後二時まで歓談した。筆者はこの心からなるレセプションに大いに感謝し、今後ドイツと日本とは互に血液型研究につき業績の交換と、研究者の交流を希望して挨拶した。このレセプションが終了する直前 Dr Richter は午後七時に、こんどは各研究者の夫人を加えてのパーティーを彼の自宅で再び開催する旨発言して会を一旦閉じた。そして直ちに会場より職場である研究所に帰り筆者も同道した。そして午後二時三〇分より六時三〇まで四時間仕事に就いた。この間筆者は Dr. Schmit の部屋で牛と鶏の血液型に関して討論した。ところが筆者は大部御馳走をいただいた後での試みで、仲々口が廻らず思わざる苦労をした。連日の実験と討論とで疲れ切っていた様子を女のこまかい注意から Dr Menzel は見抜いてその晩の会の始まるまでホテルで休養することをすすめてくれたが Dr. Schmit は仲々筆者を解放せず、いささか閉口した。ところが六時で三〇分になると、一切の仕事を折切り早速夜会出席準備をした。兎に角この研究所では予めの計画は何んでも予定通り確実に実行するということで、筆者はこの厳正な研究者の態度には感銘した。大いに日本の研究機関では見習うべき点である。夜七時には Dr. Richter の家に各研究官は夫人二人連れで集り、賑やかな夜会が始った。最初に筆者の歓迎スピーチが、こんどは Dr Richter によってなされ、続いて華やかなカクテルパーティー。日本の風俗習慣について筆者に矢継早やに質問され、いささか返答に当惑したこともあった。何れにしても家庭での夜会は夫人達を中心とした、和やな美しい集りで、夜更けと共にレコードの名曲を鑑賞し、最後に各自の隠し芸となった。そして筆者も要求され致し方なく "Ich hatte einen kamlraden" と歌い拍手喝采を受けた。

九月中旬のドイツの夜はもう日本の初冬の気候で外は寒かった。遠く故国を離れてそろそろ東京が恋しくなった時、こんなに温かい会合で筆者を取り囲んでくれるこの研究者達、家族達の心情を思うここの限りない友情に対しただ感謝した次第である。ミュンヘンのビールはうまく、ドイツ料理も珍らしかったが、それにも増してここの学究者達の気持は美しく有難い誠に美しいミュンヘンの研究所の人達の想い出となって何時までも筆者の心に残るであろう。

美しいオスローの晩秋

晩秋の北欧の空は寒く、ノルウェーの山々は紅葉と白樺で実に美しかった。筆者がオスロー空港に着くとオスロー大学の Dr Brand は筆者がチュウリツヒ滞在中ユングフラウョツホに登り記念にガイドから胸につけてもらった。エーデルワイズのバツヂをみつけて、山を愛する学友の来訪を喜ぶ固い握手をすると同時に自分の車でホテルに荷物だけを置きそのままオスロー効外の Holmen Kollen の山に案内してくれた。暫時、山頂で世界スキー選手権大会で始めてジャンプで世界選手権が出たことなどを説明してくれ、実に美しい晩秋の静かなオスローの風景を楽しんだ。

やがて山のレストランに入って夕食を採らうとした。Brand 教授と二人でテーブルに着くや否や、待ち構えていたように給仕が筆者の前に日の丸の小旗を立ててくれた。こんな北欧の山の中で、思わず祖国の旗を立てられて気持は理由なくただ感謝するだけであった。そしてまず筆者も直ぐ立って、その給仕に感謝の握手をしたのである。オスローは到着第一日から、こんなうれしい美しい印象で始った。そして来る日も来る日も午前中は大学、研究所で実験と討論をし、午後からは Brand 教授自らハンドルとって、各地の見学に案内してくれた。そして到る所で筆者の旅行の疲れを慰め、これからの研究生活を互に、充実するよう色々親身に話合った。今度の旅行中、こんな静かな美しい学友を見つけたことは他にはない。Brand 教授の友情は美しいオスローの晩秋の風景と相俟って益々美しい楽しい想い出の頁を増してくくれる。

静かなエーメスの街の明けくれ。

イギリスよりカナダに飛び、アメリカに入って十月二六日にニューヨークからシカゴを経てデモイネス空港に降りエーメスのアイオワ大学を訪れた。ここの血清学研究所の主任教授 Dr Andresen はデンマークの人で、四五歳位、熱情溢る研究家というタイプの人である。わざわざ筆者を空港まで出迎え、アイオワ滞在中、万事何かれと細かい心遣いをしてくれた。真新しい開設早々の静かな美しいモーテルを世話してくれ、ことばかりでは飽きるからとて大学の Memorial Union に案内してくれて、「筆者の長い旅行中の疲れを少しでもくつろいだ、宿泊によっていやす様にと心を配っていた。そして毎晩アメリカでは互に外国人である筆者と二人は水入らずの話に花を咲かせた。とかく物質文化の資本国家であるアメリカでは、万事総てが機械が、事務的な乾ききった風習に左右され処理されやすいところにこんなうるおいある温かい気分に接してこれまた心から感謝した次第である。

彼はアイオワからの帰途の筆者をデモイネス空港に見送って、筆者が機上に消え飛行機が離陸するまで幾度なく手を振っていてくれた。筆者は彼のコペンハーゲンに残してある夫人と子供二人の多幸を祈ることを伝えたら非常に喜んでいた。

真夏の陽にかすむナポリの港。グリンデルバルトから見えるユン

グフラウの峰々。湖水の都ストックホルムの秋景色。ウエストミンスター寺院に懸るテームス河の月。霧に包まれるエヂンバラの城の趾。ニューヨークからボントンに通ずるパークウェーの晩秋の風物。サンフランシスコのゴールデンブリッヂ。ホノルル、ワイキキ海岸の椰子の葉陰に踊る月。こうして訪れる国々の美しい景色に棲したことも確かに、こんどの旅行の大きい収穫ではあった。しかしこれにも増して幾つかのうるわしい、国境を越えた学究者にのみ与えられたる友情と、在外日本人の美しい温情とは何時までも、何時までも心の底に銘じられて、筆者の人生行路えの輝しい示標となるであろう。精神文化は物質文化に優位するとか。

紀行文

八丈島見聞録

畜四　佐々木靖

昨年の伊豆三宅島、大島に続いて、今年は二年間の念願であった八丈島に行く事が出来た。かつて鳥もかよわぬ八丈ケ島と呼ばれた此の八丈島も今日には、飛行機もかよう程である。島は東京から南方、直線距離約二九〇㎞の太平洋の黒潮の中にあり、伊豆七島中最南端の島である。丁度四国の室戸岬に緯度はほぼ等しく、今日では船は月に六回の定期便(東京から)と週四往復の飛行機も設置され、船で十四時間、飛行機で一時間二十分で行く事が出来、東洋のハワイと言う異名をもって居る。

八丈島は八丈島本島、小島、青ケ島の三島の総称であり、普通本島を八丈島と言々、行政は東京都に属し、八丈島と小島を併せて八丈町として、昭和三十年に発足し世帯数約三千、人口は三十五年現在で一二、四四四人、中心の村は三根、樫立、中之郷、末吉と小島の鳥打の五村であるが、街の形態をなして居るのは三根ぐらいであり、他は内地の山村で見られる様な村落である。

では此れから八丈島の歴史と自然文化最後に、農業主として畜産的見地から述べる事にしよう。古くは「鳥も通わぬ八丈島」「流人の島」などと呼ばれ、歴史的にひろく知られているこの島は、近代社会の進歩と共に今この感覚を一変している。昔し大名の管轄下にあって、代官、奉行、地役人などの統治の下に、宅地を設け田畑を作り、飢餓と戦いながら命がけの航海を唯一の文化移入源として遅々としてではあるが発展して来た。なお徳川封建政治の犠牲となった、国事犯としての流入のほか漂流者などがこの島の開拓に貢献したことは歴史上極めて意義深い。

伝説によると六国主命の子息である事代主命は一族の者と妃八人

をつれて伊豆七島を領し、八人の妃の一人である八十八重姫が八丈島に渡った。これが本島創始であるとされ又「弓張月」によれば保元の乱に破れた為朝は大島に居住し、近島を征服して、三宅島を経て家来と共に八丈島についたと言われて居る。

八丈島の名の由来はずっと昔は「澳の島」と呼んでいたが「女護島」「才島」「女子郷」「女子島」等とも呼んでいた、為朝出現の後いつからともなく「八郎島」と言い出し、それが転化して「八丈島」と言うようになった。

さて次に、気候は本島は黒潮暖流中にある小島であるため、海上の状態で気象が支配されることは勿論、本州陸地に比較的近接しているため、本島の天気に復雑な影響を及ぼしている。本島は温暖多温で、年平均気温一七・八度、極寒でも二度を降る事は稀で盛夏でも三十度を越える事は珍しい、湿度は年平均七十六%、従って大火災等も起りにくい状態である。降水量は四季を通じ多く、年総量三千三百四十六粍で、又風の強いのも一つの特性で殊に冬季は十m以上に達する日が月の中十五日以上もあるとの事、従って霜は殆んどない。本島は伊豆七島中大島に次いで大きく、周囲約四十㎞、面積は約六九平方㎞ある。

地勢は北西から南東にのびた二頭形火山で、北に八丈富士(標高八五四・三m)南に八丈三原山(標高七〇〇・九m)がそびえ、中間に八丈銀座ともいうべきメーンストリートが東北から南西にむかって走り、この道路をはさんで部落が続いている。

では此の辺で少し八丈島の風俗や習慣と言ったものを、私くしの見聞して来た範囲で書いて見よう。一般に言って此の八丈島は大島や三宅島等と少し変った所がある。大島の「アンコ」に相当するものが「メナラベ」といい、頭上で物を運ぶ姿が島の何処ででも見る事が出来る。又島の人は八丈島独特の織物である黄八丈を着て居る事である。此の島では昔しから蚕業が盛んに行なわれ、その糸を八丈島独特の染め方で染め上げるのであるが、染上りは、一見非常にじみに見える色が多く、雑草や、田の泥あるいは木の皮等を煮て色を出し染めるので派手な色は少い。其の光沢はすばらしく、光の当る角度により光り方も又違ってくる。

特に訪島も面白かった事は島では御馳走を出された時はそれを全部食べ上げてしまうのが習慣だそうで、見も知ぬ人からいろいろ御馳走をうけ喜しい悲鳴を上げた程である。

又島の人々は、時間的感念がひどく、十分や二十分位は平気で見のがし、一名島時間とも言われておる程であった。

特に此の島は黒潮文化の影響が強く、熱帯諸島の島々の文化に似ておる所が沢山見うけられ、中でも民家は熱帯諸島、特にジャワに見られる構造をそのまま残して居る所が多く。強風を防ぐための「カゼクネ」と言う石垣を家の周囲にめぐらしてある。此の風影は実に美しく、又あまりにもキチンと作られて居るのに驚かざるをえなかった。各家には「ボーエ」と呼ぶワラ茸の母屋と並び四尺程の太い角柱の上に乗った高倉が在り、これは穀類等を湿気から保護するのとネズミが決して登れない様に作られて居る。又所々の屋敷の奥には小さな屋敷神をもってあるのもジャワとよく似ている。此の島の民芸は牛の角力、太鼓ばやし、樫立踊り、八丈ショメ節等昔しの流罪人から授ついだ文化と言われ、今日では決った時期はなく、観光の方に利用され、年中行なわれており、島全体としてのお祭や行事はこれと言って無いとの事。ある面では残念な事かも知れな

い。次に此の島の日常使われて居る言葉であるが、これも実に面白く、特に沖縄は五島列島方面の言葉に近い感がし、三宅島とは相当の違いがある、これも歴史に関係が有り昔は中国から不老不死の霊薬を求めて東方の島々を訪れ、沖縄等を経て此の八丈島に来たと言われ又此の島の魚師も南方方面に遠洋漁業に出る事が非常に多かった事などが理由に上げられるようである。

二、三面白い方言を上げて見よう。

○きもの→ヘベラ、○今日は→アガリヤシ　タカ　○さつまいも→カンモ　○美人→ヨケコ　○娘→メナラベ、特に動物では最後に必ず「メ」を付け、例ニワトリ→トトメ、サル→サルメと言う。

以上大体島の様子を書いてみたが最後に此の島に於ける畜産を見ると、八丈島畜産の主体をなすものは牛で、これに豚、鶏、山羊、次に緬羊、アヒル、家兎等も少数ではあるが飼育している。農業経営合理化のうえに、牛は重要な役割を占めているが近年乳価の下落と飼料のこう騰に影響して、乳量が減り農家の生計を苦しくしている。しかし年中青々として冬枯れをしない豊富な八丈殊(イヌマキ)学名、禾木科八丈すすを)によって、牛の飼育は容易であり、坂の多い地形上牛の背による各種生産物の運搬に、厩肥の生産等は農家になくてはならない存在である。

特に八丈島の農家大半が、此々数年間、観覚植物や熱帯植物の栽培を盛に行い、全国の市場を支配するだけの勢力があり、一人月十万円は下らないとか、従って乳牛等の手数の掛る畜産の入る余地がなく、少し期待はずれの感があった。だがこの熱帯植物等の栽培もオリンピックを山と見て、農家でもそろそろ乳牛に変える様子を見る、町役場の畜産部でもいろいろ対策を立てているようである、又本島には古くから森永乳業が入っておるが、毎年毎年減少する乳牛のため乳量が予定に達せず、年間三百万キロ赤字経営とか、特に補助金も出して居るけれども一向に乳牛の増加の傾向を示さないのに失望して居た。特に八丈島は古くから酪農としては有名な所で、かって日本一の泌乳量を出した乳牛も出、又島で生産されるバターも有名であったが今は観光土産の程度にとどまって居る。

現在乳牛は五百六十四頭（ホルスタイン）で昭和二十七と比較すると約半分の状態であるが前述したように八丈島には一年中青草が採取出来、又三原山、富士には拡大な放牧場が在り、新鮮な水は三原山から豊富に湧き出るなど酪農に好条件を持っておるので、限ず又戦前のように畜産が発達する事を心から楽しみにして居る。

八ツ岳山麓「清里」

「太陽の輝く中を粉雪の降る」清里とはそんな所だった。朝夕の冷たさは身に喰込み、薄化粧する八ツ岳の雄姿はその冷たさを一層

畜二　坂根　修

身に感じさせたがその為か空気の清さを培加させていた。それでも日中は朝の冷たさを極度に味う為かホーボーとした小春日よりに、眠気を誘われる。

中央線小渕沢から線を引くあの美しき小海線は昨年夏の信州放浪の旅に味わった感激を冬においても私に同じ様に味あわせてくれた。小海線清里を拓一、坪井と共に下車した時は、まさに太陽の沈まんとする美しき夕焼の頃だった。清里農村センター高冷地実験農場に乗込んだ私達二人は、まず許可の返事を待たずに来た事に苦笑され許可の下りる迄一日不安な日を過したが、どうにか十二月三十日迄の実習を許されたが当日が二十二日であり一ケ月の予定が九日間の短期間実習になってしまったが、農場の都合でいたしかたなかった。こうして短期間の実習ではあるが雄大なる八ツ岳を背に私達は実習に胸をはずませ朝八時より、五時過ぎ迄の実習に励んだ。私達は畜産実習を目的としてこの清里に乗込んで来た訳であったが短期間でもあり、冬でもありして差程畜産に関して学んだという感はない。私達二人は海外移住の目的の中に畜産を今回選択したのであったが、むしろ移住の主柱をなすと思われる人間性に対して学ぶ事が多かった。清里農村センターとはカトリックとプロテスタントの間に位置するカトリックから生じた聖公会という宗教団体であり信者は七十パーセント程度との事であるが決して強制的なものではない。この中には農場を初め病院、保育園、ホテル、教会等あるが運営は教会のみ別に扱われている。農場には牛、豚そして少しの鶏がいるが、牛を主体とした牧場経営に、目下開墾が平行して行なわれており自立経営が目的ではあるが、現在まだ外人創設者ポール氏の、本国よりの援助を受けている。利益というより、むしろ研究を主体として経営されている、この清里の自立は遠い日の様に思われた。畜舎管理、豚の解体、牛舎造り等色々な実習はしたものの特別書き立てるべき事は無かった。前記した様に畜産実習よりもむしろ、清里農村センターの持つ雰囲気に大いに学ぶ事が多かった。二十四日クリスマスイブには、農場の一年契約実習生十名程と我々二人に、水炊のおばさんで質素なイブが行なわれた。ライスカレー・サンドイッチ・ケーキ・紅茶といったものを食べながら楽しいイブだった。食後八時に教会に自主的に参加し神の前に我々は、神の子として時を過した。習日クリスマスには、清里農村センターのすべての人間が集まり、晩さん会が行なわれ、一年に満たないあかちゃんから老人までに、センターよりプレゼントが贈られた。余興には幼稚園の劇が出る等して、家族単位の集まりに、これ程楽しさを感じた事がなかった。家族というそれの持つ雰囲気の固さ等、全々見られず宗教の偉大さを感じさせられた。この農村センターの人間は全部一つの家族の様な雰囲気を備えており、都会の生活には見出す事の出来ないものを、深く切に慕然と感じ取ったのである。晩さん会の席上、前牧師で現在は長坂の聖マリア教会の司祭をしている人と知り合い宗教の話に熱が入り、後日訪れる事を約束して別れた。その晩話しによれば、前植松牧師は、立派な人で聖公会一筋に生きる人だとの事だった。生活において必要なものはすべて神より与えられるという考えを徹底した人で「ヒエ」を喰っても不安を覚えず不思議にその様な時には、何かものが手に入るとの事だった。素晴しい雰囲気をもつ人間を、文章に書き表す事は困難な事だが、この様な人間の持つ雰囲気を私も、一生持続けて生活出来たら素晴しい事だろむと感じた。信念を貫く事は難しい事だが、この様に世間から冷笑

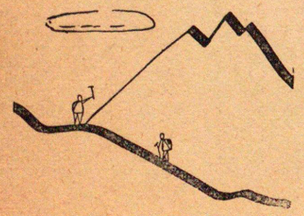
されつつも、世間に対して与え信頼を得ていく事は、どんなにか苦しい事かと思む。人間の持つ強さで、はたしてこれ迄徹底出来るであろうか。宗教がこの人を支えている事に、何の不思議もないし又その力の多きい事に驚嘆せざるを得ない。彼の家には宿無しの、前科者が常に世話になっているという。そして彼の子供達の直さと明朗さはどこから生まれてくるのだろう。

前日汁粉五杯に、ライスカレー二杯を喰い、痛む胃をがまんしながら三十日雨の中を長坂に訪れた。丘の上に山小屋の様に立つ教会に十時に参加した。ほんの数人の前に熱心に説教する牧師を見つめながら涙の出る思いだった。

北海道開拓酪農家での実習記

畜三　栗原良雄

僕達、夏休み以前より計画していた、北海道での実習が実現し、M君とH君と行く事になったが、H君が家庭の事情で行けなくなったので、M君と二人で未知の土地である北海道へと、上野駅を七月二一日に出発した。列車は一路青森に向ったが、青森に着いた時はワイシャツが煤煙でだいぶ黒くなっていた。ここで青函連絡船「十和田丸」で北海道へ渡り再び、汽車に乗り、二三日に最果ての町根室に近い姉別駅で降りたが、目的地までは何の交通機関もないのでやむをえず、集乳車に便乗して目的地に着いたが、少し休んだだけですぐにカブの除草の仕事に取りかかった。この家は主人と奥さんの二人だけでまだ、新婚五ケ月ほどで、この家の概略は、一ケ所に土地五〇ヘクタルほどで、その内牧草地十二ヘクタール、で他は全部放牧地になっていた。家畜は、搾乳牛七頭、その他十四～十五頭位と馬が二頭いた。三十八坪のキング式牛舎、サイロ二基、レーキモアー、馬車デンボク、スキその他を所有していた。主人は北海道では数少い人工授精師の資格を持っていて、酪農組合の役員もしているなどこの村のリーダー格でした。北海道の夏は短いので、この間に冬の牛の飼料を確保しなければならない。特にこの根室地方は霧がまくので天気が悪く、晴れた日は四日とは続かないし温度も三十度に、昇ることはめずらしい位に涼しい所なので、乾草作りも楽ではなかった。朝四時に起きて（これは主人と奥さん）搾乳をすませて牛を放牧し、天気の良い日は、朝飯前に朝露の中で牧草をモアーで刈り、午前中に反転して午後に馬車で牛舎の二階にはこぶのだが仕事の割に汗は出ない。その点仕事がしやすかった。一日乾草の収穫をやっていると、夕方歩くのもいやになる位疲れる。この苦しい中で主人と奥さんは将来の夢をもって働いていた。疲れた時ここの水がまた、非常に冷めたくてうまかった。ここの水の中に真夏でさえ、手を三分と入れていられない位に冷たい。天気の悪い日は、カブの除草だが、畑があまりにも広いので一往復するのに一時間かかるので、一日に七～八回往復すると暗くなってしまう。この様に毎日単調な仕事の中で北海道の、この地方独特の経営を勉強してきたつもりでいる。その一つは、冬期はほとんど青刈飼料がないために、夏の間に牧草を収穫して、それを貯蔵するのだが、何十頭もの牛の牧草は、牛舎に収納しきれないので牧草畑の中に、三本の木を組んで乾草を積んでおく三角架という方法と一本の木のまわりに積む方法とがある。また、牛の飼い方というのも本州とは、比べものにならない位粗放的で、搾乳牛は、搾乳するときしか牛舎に入れないで、夜でも、どんなに雨が降っても牧場に入れてある。仔牛も同様である。まして肥育牛などは、夏の間だけ肥育するのだが、全然牛舎には入れてもらえず、放牧場の中で生れて、売られるまで放牧場の中にいる。その放牧場もあまり土地はよくなく、牧草といってもそれは名ばかりでほとんどが雑草である。この様な飼い方なので、知らないうちに分娩が行なわれ牛舎に帰る時に一緒につれてくる事も時々あるそうで、また発情期もなかなかわからない時が多い様です。乳牛も純粋種は少い。牛を集団で放牧しておくと必ずボス牛が現れるが、やはりボス牛には力があり統一力のある牛がなる。しかし、ほとんど角のある牛がボス牛になっている。連日、牧草収穫とカブの除草が続いたが、雨が降ると仕事何もなく、町に出るのも四km歩かなければ出られないので、一日中家にいた。また、実習中二度台風に見舞われた。だがたいした被害はなかった。実習中、一日ひまをもらってM君と日本の最東端ノサップ岬、根室港、車石で有名な旅咲岬へ行ってきた。ノサップ岬では霧の晴れ間から時々ソ連領の貝殻島がみえた。またこの辺の漁民も生活が苦しいらしい。この地方は雨が降ると寒く日中ストーブをたいている位だが、夜の星は、スモッグの多い東京と違い、こうこうと輝いて、その中を近くの灯台の光が時々きらっきらっと光った。苦しかったがその反面大いに勉強になった。二十日間の長い実習も終り、主人と奥さんに別れをつげた。釧路でM君と相談の結果、阿寒国立公園を見る事にして阿寒湖畔で一泊して、マリモのねむる阿寒湖を遊覧船で一周した。その後、サビタの花の咲く北海道の道路を観光バスでで、弟子屈、透明度世界一の神秘の湖摩周湖、川湯硫黄山、温泉、屈斜路湖より、和琴半島をまわり、屈斜路湖が一望におさめる美幌峠で雄大な景色を味わい、美幌より札幌に向った。途中、北海道を襲った台風の跡が所々残っていた。札幌では、北大農場内にあるポプラ並木をM君と歩いた。函館より真夜中の連絡船「十和田丸」で北海道を後にした。実習中お世話になった。主人と奥さんに感謝している。帰り主人に、来年また来てくれと言われたが、また機会があれば行きたいと考えている。北海道の農家は大学生が実習に来るのを大変望んでいることを最後に筆をおく。



東北へ

斎三　岡田宏俊

我々は予てより計画していた。東北旅行というより無線旅行牧場周りを昭和三十七年八月二日、S・O両名により実行にうつした。希望と不安でいっぱいのまま、ある友達の見送りを受けて、上野をあとに一路陸奥向つた。

☆　蟻との戦い

宇都宮を過ぎる頃、「今日はどこへ行こうか」「そうだなーどこにしようか」「磐梯高原桧原湖どうだろう」「いいせんだね」てなように、万時この調子であるので先が思いやられる。郡山から常磐西線で猪苗代へ行き、バスで磐梯高原へ、ここのバスは荷物も運賃を取るようで一個に付二〇円である。高原着とさつそくテントを張る場所を捜しに案内所へ僕等はどこでも張れるつもりで、どこか良い場所はないかと思い聞いてみると、この辺は国立公園で指定地以外はキャンプ出来ないとのこと、それではお面白くないので（キャンプ場が汚く荒れて人がいっぱいであったことと、所場代が高かつたこと）磐梯山まで行くことにした。頂上までは徒歩で二時間半とのことだつた。キスリングが重たく途中のスキーリフトの台の上で僕はのびてしまつた。Sは山によく行くが、僕は山はあまり好きでなく、高原位が手頃である。我々が磐梯山へ登るころは皆山から降りて来る所であつた。「今日は」「今日は、今から登るのですか」「あとどのくらいありますか」などと挨拶を交わした。見上げると山は上へ上へと高くなるばかりである。そこでSと協議の末、あたりも暗くなつてきたので、途中でテントの張れそうな場所を見つけることにした。場所は有るには有つたが、水が無く一〇〇m位上にスキーリフトの見張小屋みたいなものがあつて、そこには一定の時間に水が出るようになつている。なにしろキャンプするには水さえあれば、もちろん食料有つてのことだが、どこでも張れるが、水が無くてはお手上げだからである。我々のテントは、テントといつても、名ばかりのもので、出発する前日ビニールによつて造つたもので、朝方になると、上から雫が落ちてくる。見ると、何んと、人の吐く息とその他で水滴がビニールにいつぱいついていてそれが時々ポタポタ落ちてきて大変不快であつた。それにも増して、不快なのはテントの下に蟻の巣があつたらしく、蟻が顔といわず耳といわず手足背中お尻と身体中容赦なく、這づり回つたり、喰いついたり、時間がたつに従い潰し方も覚へ、手探りでも、ぞろぞろ這ずり回る蟻を見当つけて潰すありさまなので、ろくに第一日目は楽しいあの子の夢もみることが出来ず、おかげで、朝方ちょっと寝ただけだつ

た。そうそうそれに蚊もいたっけ。

☆　田舎のバス

福島県庁で紹介され、岳温泉にある、畑作原種農場で泊めてもらい、八時頃場長さんに別れを告げここから四十分位の所にある高原状の二本松市の放牧地に出発、早くもすすきの穂が小雨にうたれていた。標高五百九十六m牛の放牧場で乳牛（ホルスタイン）七十頭和牛十七頭、計八十七頭で七月一日に放牧したばかりとのこと、敷地は三十町歩、ここからは二本松市福島市が眺められた。近くの清流の音と山百合の香りが耳と鼻をかすめていった。二本松駅まで送りバスで浪江へ二本松からは三時間で行くそうである。このバスの運転手と車掌が大変良い人であった。車掌は走行中、つまり勤務中にいろいろ親切に旅行の話とか、この地方のことをよく話してくれた、このあたりは周りは山に囲まれ、たばこ栽培をしていた、乗客は普通五、六人で、我々二人の時もあった、途中、西部劇の駅馬車に出てくる様な中断所で十五分位休憩してまた出発、また車掌が、ひどいことには座席に座って、こっくり、こっくりやり始じめた。なんだか、こっけいやら、ひやひやするやら。運転手は、中継所と浪江で牧場等を探がしてくれたが、近くにはなく、駅から一km位離た集乳所で、牧場を紹介されて集乳所の自動車で双葉牧場まで送ってもらった、この辺の牧場は開拓者が多く、ここも何人か集まって畑を二十町歩を持ち、ホルスタインの成牛が八頭、未経産牛が十二頭、仔牛が四頭でその他に馬鈴薯をだいぶやっていたようだった、夕方、予定日よりも早くお産があり、若衆が二人だつたので、高校時代の経験を生かし、手伝ったが残念ながら牡であった。この牧場はまだ出来てから二、三年とのことで、望み多き将来がある。

☆　私の行く所どこでしょう

朝早く起き、浪江から列車で仙台へ十時半着、ちょうど今日の午後から、七夕祭が行なわれるとのことだったが、時間の都合上残念ながら見ずに石巻まで行き、先輩を訪ねたが日旺の為外出中であった、仕方がないのでバスで女川まで行き、そこでキャンプをすることにした、しかし、そこの川の水がからからに乾き、水の「み」の字も見当たらない。（私）「あの！この道はどこへ行くのですか」（附近の人）「さあ」「どちらに行くのですか）（私）「さあ」「どこにしましょう」てな意味の通じない会話を交わした。疲れてきたせいかSとの意見があわなくなってきた。ここで喧嘩してもはじまらないので先に進むことにした、やっとのことで水源地をみつけこでテントをはることにした、その晩は、そこで十時頃まで人生論を語り合った。

☆　重いキスリング

地図によると鳴子のあたりに牧場があるようなので、汽車に乗ったが、小牛田附近で雨が降り出した、例の通り予定を変更し盛岡まで出ることにした、上田蛇島に友達を訪ねて行つたが、まだ東京から帰つて来づ留守であつた、この附近の人達で三田農場という、リンゴ園といくらかの家畜を飼っていた、帰りには、リンゴをたくさんいただき、キスリングが重くて重くて。友達がいないので泊めてくれとも言えず、ここから十分位の所にある、小泉牧場に行き、見学しながらなんとかここに泊めてもらおうと、それとなく話をしながら様子をみたが、どうもうまく行きそうもない、しかし、ここで県の畜産試験上を紹介され、試験場の施設のクラブで泊めてもらうことになった。しかし、小泉牧場の牛は、形態的にも、内容的にも

良かった、頭数二十頭内高等登録牛九頭仔牛四、五頭、敷地三町歩であった。

☆　天の助け

この畜産試場の放牧地へ牛を見に行ったが、思ったより広く後の方に雲がかかった岩手山を背景にして、とても眺の良い絵に出てくるような景色であった、この後県の種畜牧場と農林省の東北農業試験地に行き見学した。ここでクラブのおばさんに作ってもらった。おむすびを取り出したが、とても大きく、握りこぶしを二つ位合わせたおむすびで、二つ食べるのがやっとだった。盛岡から橋場線で一生に一度行きたいと思っていた。小岩井農場へ行く、先ず見学する前にキャンプ出来そうな場所をあちこち探がし歩き回った。しかし、適当な場所が無く、Sが中央の事務所に聞にいった、その結果、キャンプ場は指定された所でしかできぬとのことであった。その日のうちに牛だけは見たかったので牛舎に行くとすでに戸は閉っていた、そこで、先輩に合い見学をさせてもらい、その上、泊めさせて頂いた。

☆　S騎子落馬

級友のSA君の家でいろいろお世話になってしまった。SA君と我々三人で先輩の盛田牧場に行き、いろいろサラブレッドを見せてもらった、頭数は三十五頭位でこの中には日本ダービーで優勝した馬もいた、この七戸は、馬が多いがリンゴを作っているところがなかった。これは地質の関係だそうだ。近くには、農林省の奥羽種畜牧場があった。SA君は二時ごろ家に帰った、夕方、我々は、馬に乗せてもらった。しかし、Sは高校時代の経験をいかして乗りこなしていたが、千八百mのコースのうち三百mは歩いて帰ってきたというよりはっきり落馬したといった方がいいかな。僕はお尻がぽかぽかあたって、あとで非常に痛かった。

☆　初めて見る日本海と秋田美人

秋田県の男鹿半島の門前で泊り、半島状の松の木の下でテントを張り、海からの風がそよそよと快く吹き上げてきて、寝心地はこの旅行中一番良かった。この半島は絶壁が多く高さは、七十から百m位で眺は最高であった。翌日はゆっくりと一日泳ぐことにした。半島の絶壁を下におりると、人けのない所にでた。僕は人間の心理である。未知の世界のあこがれともいうべきか、この岩の裏側を見にいった。Sは絵を書いていた。なにしろそこは絶壁である。岩はぼろぼろ崩れ落ち、足はすべり落ちそうになってやっと向う側の見える所にきた。しかし、向うもこっちもほとんど変らず多少向うの方が起状が少なく、海岸線は美しかった。それからが大変、行きは良いが帰りはこわいので、泳いで帰ろうと下まで降りてゆき、着物をバンドで頭にしばりつけ海に入っていったが、着物がねれそうなので（本当は、Sが居る所までは五～六百m位あり海水はとてもすんでいて少々こわかった為である。）来た所をよじのぼりもとの所にもどった。それから少し進んだところに、船着場がある。そこで又Sはスケッチをし、僕は泳いだ、この辺の海岸は大体が遠浅で所々岩がつき出たり急にひっこんだりしていて、三浦半島の油壺に似ている。船着場の棧橋の上で休んでいると、女の人がこちらに回って泳いできた、そこへ小船が近づいてきたので彼女は、あわてて橋の近くの岩へつかまろうとしたが、大きな波が来て手がすべりぶくぶくと、そこで僕は男として見ている訳にはゆかず降りていって、手をさしのべて助け上げた、そこでいろいろと話そうと思ったが「ありがとう

……」はいそれまでよだった。彼女は秋田市から来たそうで、なるほど美人であった。四時ごろバスで船川までゆき、夜行列車で新津まで行く。

☆　帰　途

帰りは、新津より特急「朱鷺」で上野一時十分に着いた。Sのヒゲは長く伸びてちょっとしたものだったが、僕の方は、まばらだった。長い様な短い様な旅行もここで幕を閉じた、いつまでもよき思い出として残るだろう。参考までにかかった、費用を述べよう。

予算（二人分）15,000　周遊券　5,280　食費　4,422
交通費　2,760　設備費　737　雑費　970　計　5,169
残金八百三十一円は写真の現像代にまわした。

■先輩よりの寄稿

畜産学落第生

（三八年卒）滝川昌宏

私が畜産学を志して入学した頃、ようやく日本の農業の中における畜産界のウェイトが重きをなしてきたといえる。そしてそれが畜産の振興という農政面での現われに連なり、一昨年に出された農業基本法においてそれは定着してきている。それが昨年秋以来の貿易の自由化によって再たび大きな変動を迎えさせられようとしている。

そのような畜産界一般の動静の中にあって私は四年間〝畜産学〟というものを教授され学んできた。私がここでこのようなテーマを敢えて選んだのは、私の成績が可、良の林立する中でわずかに発見される優位を称して選んだのではなく、私には最近〝畜産学〟と称するものが学問であるのか否かについて疑問視されてきたためである本来学問といいうるからには科学という範疇で捕えられるものでなければならない。科学とは何か、これは実にわれわれに多くの疑問を投げかける問題である。こと畜産学と称する場合、物理学や数学、などのプロパーというがポピュラーな科学ではないことは一応の理解は出来るが、かといって医学や工学のように応用科学の範疇で畜産学を捕えられるかとなると、そこにおいても一抹の問題が残るのである。湯川先生はよく学問というものを論じられる場合、数学と医学とを対置されるが、われわれがここで論ずる畜生学というものは応用科学の分野にさえ、ほど遠いものを持っている、となると畜産学とは何ぞやということに当然はねかえりがくる。一言にいってしまえば畜産業というものの上に成り立つ理屈の域を出ないので

はないかと思う。それが将来において学問たり得るだけの一要素を持ち合せていないかというと、私はそうは思わないのである。

本来応用科学というものはプロパーな純粋科学というものとは異なり、生産の機構なり理屈から端を発する場合がきわめて多い。医学にあっても工学、農学にあってもその面は多分に持合せているし、それだけプロパーの科学と対置すると人間生活と密なるものを持合せている。むしろ原子爆弾が出現する以前においては、物理学や数学は人間生活とは〝疎〟の関係を有していたといえる。

そのような中に物事を思考して行くと、英国などの様に早くから畜産が学問的に思考された処は別として、日本のようなところにおいては農学というものの一部の存在として考えられてしかるべきものではないかと思う。ここまで話しを進展させて来ると、本学開学の祖である横井時敬先生の言葉である、〝農学栄えて農業滅ぶ〟という言葉が身にしみて来るのである。

ここにおいてポアンカレーを引出して来る必要性はないほどプロパーの科学と畜産学との隔りは大きく、それは論ずる必要はないと思われるので、湯川先生が対置される医学という部門で代表される応用科学にも程遠い存在たるかを論じてみたい。

畜産というものを考える場合、そこに〝産〟という字を抜いては考えられない存在である。その背後には生産するということと、そのものから経済性を除外しては考えられないことになる。

その第一点の指摘と、日本における畜産という存在が、日本人民の歴史の中で占めて来たウェイトが特殊なものを除いて、ごく最近、せいぜい半世紀から一世紀止まりの歴史しか持合せていない点にある。そのために数多くの先覚者は出たものの未だに科学としての範疇では捕えることの出来ない面を持っている。少なくとも畜産というものを離れて畜産学を考えることが出来ない以上、また家畜・家禽を離れて畜産を考えることが出来ない以上、畜産学も家畜というものを通して、経済性をいかに増すかという点が主要な問題となる。

いやそのポイントを離れては畜産等は存在しないと考えてよいのではないか。

さてもう一度学問あるいは科学の定義にもどろう。もともと科学、あるいは学問はその本源的目的は真理の探究にある。しかし経済検定がそのものの持つ最終的なる重要なポイントであるとするならば、それは表面上、学問の装いを呈していても、それは学問とはほど遠い存在にあるといえる。

ポアンカレは〝科学と方法〟の緒言で「科学の方法は観測と実験とに存する。科学者に果すに、もし無限の時間を以ってするならば、彼にむかってはただ見よ。而して正しく見よ。とのみ、つげれば足るであろう。しかしながら科学者は一切を見つくすほどの時間、ましてまた一切を正しく見つくすほどの時間をもたない。また下手に見るくらいならば、むしろ全然見ないに如かぬ。よってここに選択の必要が生ずる。それ故に、まず如何に選択をなすべきか、それを知るのが第一の問題となるのである。これは歴史家のみならば、物理学者にも、さらにはまた数学者にも課せられる問題であって、これらの各学者を導くべき原理の問には、おのずから相類似するところがないではない。科学者は生能的にこれらの原理に従って行く。故に、数学の将来のいかなるべきかも、この原理を考察することによって予見することが出来るのである……」

これは五〇年前に亡したフランスの数学者が書いたものであるが、科学全般に言及されるべき巾の広いものと思える。

また畜産という第一次産業として存するものはその歴史において豊富な面を持って当然であると思われるが、仏教の伝来普級によってそれがむしろ人為的に日本人の中に入りこむ要素を押えていたという中において、民族性、歴史性の乏しいものとして存在している。このことは日本独自の家畜の品種が数えるほどしかないことを考え合せてもわかることであり、現に最近ですらこの傾向は覆い隠すことは出来ない。

私は以上の見地に立って畜産学なるものは存在していないといって過言ではないと思う。だからといって今後それが立派に学的体系される要素の否定をするものではない。むしろ私は畜産学科を卒業するにあたり、このことを自覚すると同時に、私なりにこの大問題に向って進みたいと思っている。

「日々新」

武者小路実篤氏をたずねて

（三八年卒）　高山昭夫

「ごめん下さい」一声で中から返事がある。「はい」一瞬静けさが破られた様な大きな声である。僕はためらった。「どうぞ」とふた声目を聞いて、ずっしりと閉ざされた戸びらに手をした。そっと開けると、戸びらいは意外に軽くあいた。先生ではなかった。ほっそりとした若い人。戸びらを閉め終らないうちから「どなたですか」といきなりたずねられたが、僕は落ちついて（それも無理に）反対むきになってまず戸をそっとしめる。あらためて「私は……」と紹介したらすぐ先生のもとへ、とりついでくれた。

きのうは、いくら声をかけても答えがなかった。14回～15回位「ごめん下さい」「こんにちわ」「失礼します」と何度も繰り返した。だが、入口の如来像だけがこんもりとした暗さの中に知らんふりをして立っていた。物音一つしない。突然、隣の家の犬がほえどぎもを抜かれた。丁度、山深き寺小屋に尼僧がたずねあてた喜びと何の応答もないさみしさとを、今味わっている様な、そんな気持でとぼとぼと帰ったのだ。今日は会える。そう思った。先生の書斎には、お客さんがみえている。きのうの人気のない、静寂さと不気味さから、急に解放された思い。「人が住まっていたのだ」安心感が湧いてくる。家全体がこんもりと木々につつまれて暗かったせいだろうか。

とりついでくれることになった。「どうぞお上がり下さい」細い

人は応接間へ案内した書斎のとなりの部屋、そこにはたくさんの絵が額におさめられて、ところせましとかけてあった。それだけはわかった。若干の本もあるなということもわかった。だがまず先客のわきに席をすすめられて、おちつく。ソファーが僕の重みで次第に下がるのが感じられる。入ってからすぐ、ジロジロと部屋を見わたすのもちょっと気がひけたのだろうか。無意識に緊張した様である。厚い美術書が、部屋の空間をうめて、あまり整理もされずにならべられてあるのが目についた。

かしこまっていると、先客からタバコをすすめられる。恐縮して一本拝借する。名刺をわたされて、日本美術協会の旭谷氏という人であることを知る。それが何んの会かも知らないが、僕の方も紹介せずにはこの場はまずいその時から、会話は何くれとなく続く。おおらかなタイプの人で、話しかけられたら急にこちらも話したくなった程。「僕は東京農大の学生ですが、今年卒業します。千葉でこれから農業教育をすることになりましたが、先生の『新しき村』に示された理想的人間像と私の理想とする新しい農民像とが妙に一致して来たのです。この頃先生の著作にも親しむ様になりましたが、来年からは実践です。村に入っても、少しづつ本でも読んで考えたい今日は記念の筆をとっていただきたいと無理にお願いしましたら、こころよく受けて下さいました」「そうですか。千葉だったら、東京に近いし、田舎といっても此処より便利ですよ」

「そうですね、ここも都心に出るにはちょっと乗り変えが多いですね。しかし村の生活も個人の自由な性格の発展の為には色々と障害が多くて」

「そう――文化的にめぐまれないということが一番大きな問題ですね。だけどこれからはよくなりましょう?」

「新しい農民像は、単に文学の世界だけに求めるにあらず、やはり実践の中に生かされるべきでしょうが、現在はあまりにも経済的制約ばかり云々して、その根源となるべき人間的必要性がわすれられている様な気がするんです。経済的欲求の他にもっと大切な精神的欲求がわすれられているみたいなんですが」二人の話しははずんだ。書斎からはふすまを隔てて笑いがきこえた。芸術論に花が咲いている様子である。

旭谷さんは、我々のこしかけているソファーのうしろの丸テーブルから、一つのジャガイモを手にとった。

「おもしろいですねえ」満足そうにつぶやく。

「僕も先生のカボチャが大好きです」

「そう、先生、よく集めましたねえ」

丸テーブルの上には、二つの筆筒に三〇本位の筆がそれぞれさしこまれ、そばにピーマンやにんじん、青い芽のふいた玉ねぎなどがのせられてあった。先生の絵の主題がならんでいたのだ。うしろをむいた機会にずつとまわりを見渡すことができた。静な絵が大小壁にかかって、眠っている様にもみえた。

それからいくつかの会話が数分の時とともにながれた。

となりの部屋の話しごえがやみ、どてら姿の先生が出て来た。意外に顔が白い。我々が家でひっかけているひと衣ものよりも古ぼけたどてらだ。絵具がところどころについて、細いふちのメガネが鼻の上までずれ落ちている。一歩一歩近づいてくる姿は、田舎のじい様にそっくりだなあ！　くつ下がずれおちて、腹おびはへその下にたれ下がって、妙にかざり気はない。僕の前に、何もいわずにすわ

られた。こちらから名のる前に、「何が欲しい。書くものあるかな」と出鼻をくじかれた。「はい」あらかじめ用意していった先生の詩集から、一句を注文した。先生はこの様な注文には、自分から考えて書いてやるのをめんどうがっていることは知っていたから、僕の最も好きな言葉の一つを用意していた。だまってその紙をもって出て行く。十分位はこなかった。その間、今迄先生とはなしておられた客も時間まちのかっこうであろう。話しがずつとしらけた様子である。一人の人が応接間にたばこをすいに出てきた。先生の部屋ではたばこは御法度らしい。秋田の横手育ちだという旭谷さんを中心に「かまくら」の話しが始まった。新しく加わった芸術家タイプのタテにシワの長いその人の名は知らない。「新しき村」の関係者らしい。

『かまくら』については僕に独自の説があるんですよ」たてしわの老芸術家が話し始める。

「あれは、どうもセックスに関係のあるものが、地方で尊ばれる証拠に思う。あのカマクラは全体に子宮の意で、中の水神様が卵巣ですよ。似ているでしょう。この辺にあのならわしのイメージがある様なんだが」

「なる程」二人はうなずく。

「それがねえ、むこうの人にこんなことをいったら、いやらしいって相手にされなかったが、水の足りない地方でもないのに水神様をまつるのもおかしい。何も求めるもののない雪国の生活で、性への郷愁が生じることも当然とも言えるでしょう。」

「それはおもしろい。発表したらどうですか」旭谷さんが賛意を表す。

僕にはかまくらの由来がわからなかったし、何がかまくらの中にまつってあるのかも知らなかったので、「ほう、そんなものかな」とおもしろくなった。

こんな話しが、なんのわだかましいもなく続く。いつの間にか部屋の一員になってしまった様だ。楽しくなって、今度は何の話しが始まるかなと期待していたら、先生が書き終って書斎から出てこら

新しき村の精神を簡単に書くと

1　全世界の人間が天命を全うし各個人の内にすむ自我を完全に生長させることを理想とする。

2　その為に自己を正しく生かすようにする。自分の快楽、幸福、自由の為に他人の天命と正しき要求を害してはいけない

3　全世界の人間が我等と同一の精神をもち同一の生活方法をとることで全世界の人間が同じく義務を果せ、自由を楽しみ、正しく生きられ、天命（個性をふくむ）を全うすることが出来る道を歩く様にする。

4　かくの如き生活をしようとするもの、かくの如き生活の可能を信じ、それを全世界の人が実行することを祈るもの、又は切に望む者、それは新しき村の会員である。

5　されば、我等は国と国との争い、階級と階級との争いをせず正しき生活にすべての人が入ることによって、入ろうとすることによって、それ等の人が本当に協力することによって、われ等の欲する世界が来ることを信じ、又其為に骨を折るものである。

（「この道」より抜すい）

れた。
「はい。この『真剣』の『剣』の字がぬけていたからなおしておいたよ」
お願いした詩の一字がぬけていることをことわって、ぶっきら棒に手渡してくれた。ぶっきら棒の中にも、ひきつけるものがただよっていた。まだ墨がぬれている。
『日々新、日々決心、日々真剣、日々勉強、日々生長』
まだ書いたばかりの書から、体温のあたたかさを感じさせる。おもわず、じっとみつめた我が生涯の農民像探究における出発を誓うに最もふさわしい言葉である。
日頃から、こんなことを思っていたのだ。
農村の最近の変貌を、経済史的観点からみて、現在は農業革命の時代であるというので一般化している。しかしこの経済機構の変化の中で、農民の個人個人の人間性がどれ程に大切にされているであろうか。
経済的再編成が人間性をも忘れさせ、ゆがめた農業問題論が流布している。人間そのものに対する感心がうすい。新しい農民は、個々人の能力と精神を完全に生長させることを基礎に経済的要求が併行しなければならない。この理想は僕のこの四年間に得た唯一つの真理ともいえる。精神の完全なる生長に、少しづつでも近づける為にも、日常生活における師の思想がよくてあらわれている。僕も実行だ。一同の目がこの書に集まっていた、その時、「こりゃ、なんじゃね」先生が突然ソファーの上のばれいしょをさして、旭谷さんにきかれた。
「はあ、今、この学生さんとこのじゃがいもは大変おもしろいでしょう。先生のユーモアがほとばしっていますねえ。などと話し合ってたんですよ」にこにこと笑い答えた。
「そうかね。だけど今書いているんで、あんまりさわらんでな。そう、その分はもう書き終ったから良いが」
ものやわらかい口調で注意ごとともきこえなかった。この上もなく愛しているんだろう。素材への愛着が、それとなく知れたのだ。先生も安心した様子でもとの丸テーブルへ馬れいしょをもどしながら、ほほえだ。
他のものも、思わず苦笑した。先生は再び僕の前にすわった。そしてまず僕の話しをきいてくれた。
「これから農業教育を一生の仕事とするんです。教育の理想は人間像の理想に直結していると思います。そして、その理想は先生の「新しき村」で指向している人間像は今でも正しいと存じます。ただ、その理想をこれから村に入って、どれ位生かせるかが大きな悩みです。卒業を機会に先生の体臭にふれられ、しかも、この様な心のこもった書を贈っていただいて、大変うれしいです」
「うん」何か考えておられたが、すぐ
「その本を一冊あげなさい」とさっきの細い人に言った。僕はそれをもらった。『この道』と題する小冊子である。
「君も、いつか暇な時に気が向いたら村へ立ちよって下さい。今日は、お客が多いんでゆっくりできないのが残念だが、なんだったら絵を書きながら話そう。そのうちにお茶が入るから」言い残したまま、書斎に入っていかれた。あらためて、「ありがとうございました」と大きな声で感謝の意をのべた。
『この道より我を生かす道なし、この道を歩く』先生の脈々とな

がれる血気が、今も生きつづけているのだ。
ひざの上の書は、まだかわかなかった。「どうしよう」心のうちでとまどう。仕方がないから乾くまで待つことにして、この部屋を少しでもゆっくりと堪能したいという気持の方が勝った。『この道』の一頁をめくりで頁にうつる。書斎から、さっきまで話していた先客の三人が出て来た。話しが済んだらしい。
旭谷さんともう一人応接間にいたたてじわの芸術家とがその三人になにやらあいさつを始めた。今度は旭谷さんの面会の番だ。
僕もそろそろ帰りたくなる。書もかわいていた。そっとふろ敷包みに包んで、細い人にお礼を申し上げた。もう、さっき先生にはお礼申し上げてあるかよかろうと思っていたのでそのまま帰ろうとした。
「ちょっと、先生に——」との案内に細い人に従がった。書斎のふすまをあけると、先生はこしかけにすわって書いていた。どんなものが、どう配置されていたかは気憶にない。何があったかもわすれた。ただ雑然とした中にある暖かいムードの部屋で、キウリを書いておった先生の姿が印象的である。外のあの暗さと変って、実にあかるくさっぱりとしているのだ。
「先生、ではこれでおいとまします。少しづつでありますが、また一度お会いしたいと思いますが、どうぞよろしく」
「どうだね、入りませんか、絵を書きながらでも話そう」
「はい」ちょっととまどった。別のお客さんが一人先生のわきにすわっている。お邪魔しては、まずいなと気がつくと、ためらいも消えた。
「今、お茶も入るよ」先生は続けていわれた。
「はい、しかしこれで今日はお邪魔します。」
「そうかね、またゆっくりと来なさい。今日はお客が多くてなあ」老顔は一見無表情ではあるが、親切そうに言った。よく写真でお目にかかる姿と何も変らない。今迄は武者小路実篤」といういかめしい名前とあのにが虫をつぶした様な顔とでけんえんしていたし、興味も湧いてこなかったのだが、その理想とする美しさが深くひめられているのだ。
「少しづつではありますが、やってみます」
筆をやすめていたが、最後の僕の言葉に又筆をとって書き始めた。
そっとふすまをしめて、閑居を辞した。
先生の家の玄関から入口の門までは急な坂である。しもどけのした道が赤土を出してぐちゃぐちゃになっていた。一歩一歩、今迄の緊張がほぐれて、はつらつさにと変わっていくのを覚える。あっさりとした青空を見あげて何も言うことがなかった。きのうきた時の厳しゅくさからも解放されて、胸に力の湧いてくるのをどうすることもできない。
ふるぼけた木の門は家から一〇〇m位の所に立っている。押すと倒れそうに古い。通用門をくぐって、ふり返ると、「これより先、自動車は立入らないで下さい」と先生の筆で小さな板がぶら下げてあった。
一〇〇m先では、静かに力強い生活が営まれている。人間の理想に向っての探究の毎日が——。
(この報告は私の新しい農民像に対する探究のふじみの投稿第三編固である。「新しき村」運動を理解する為の現地報告であると共にその理想は日本における農民の新しい人間像への一方向を示している

隨想

食肉考

助教授
畜産製造学研究室　鬼原　新之亟

動物性蛋白質の摂取が殖え、漸次洋風化しつつある、我国食生活の傾向は平和なスポーツの普及と相まって、日本人の体格の向上にも大に役立つているものと考えられる。戦後畜産が盛んになり、国民所得の増加に共つて肉の消費も「ニク」らしい程、増加しつつある。遠くさかのぼって我国の食肉を見ると、宗教の影響により抑制され、これがようやくすたれたと思ったら経済上の理由により、もっぱら魚を食はざるを得ない状態であったのである。正に民族の悲劇である。肉の良好な風味、と栄養的に畜生産物価の蛋白質と、高カロリーの脂肪を含み栄養価大でだれでも食べたいなあと考えているのである。然し反面、肉を多く食することによって起る、色々の人類に対する障害についても重要な問題がある。その一つは蛋白質による腸の毒血症、及び蛋白質の最終破壊からの含窒素物の作用による。腎臓病などと言われているが、肉蛋白質がこのような病気の素因になると言うことは明らかに証明されてはいないが、これらの非難を除く必要がある。次は動脈の退行性障害である。脂肪が退行性動脈障害の素因となること、即ち動物性脂肪のような飽和脂肪酸の割合の多い脂肪は、血清コレステロールを増加させる傾向がある。血中コレステロールが多く含まれることが、動脈硬化症とある程度の関係ある事が証明されている。植物性脂肪は不飽和脂肪酸の割合が大きく、血液中のコレステロールの水準を低下させる、故に飽和脂肪酸に富んだ肉を多く食べている人々が、動脈硬化症になる事が多いと言われる栄養学的にこれらを防止するには、脂肪の多い肉の消費をさける以外にないと考えられる。

最近の肉生産技術は多脂肪性肥育と言われているが、今後はこれと異った新しい肉生産、即ち脂肪含量の過剰でない肉を生産する必要があると考える。また肉加工品も脂肪含量を過多にする事は良くないと考える。

偶感

助教授
家畜診療所　平山　常雄

小田急の急行は、かなり込んでいた。伊勢原駅に着いた時、七十年配の婦人が乗込んで来た。両手には大きな風呂敷包みを持っている。静かに走り出した電車ではあるが、やはり動揺する。此の婦人、座席もなく、吊り革にも縋まれず、当惑しながら蹈めいている。正面に坐っている若いBG風の娘と背広の青年は知らぬ素振りをしている。その隣に坐っていた一人の木訥そうな青年が立ち上って席を譲った。老婦人は感謝しながら席に着いて安堵の情を示した。一、二分間のありふれた出来事である。だが、初めから眺めていた私の胸にホッとした感情が湧く。

雨の日バスに乗った。誰の靴も泥に汚れ、持っている傘からは雫がポタポタと床に落ちる。床は泥と水で汚れている。乗客の誰もが、衣服を汚すまいとして注意しているようだ。バスの中程に坐っていた一青年は、悠々と肢を組んで泥だらけの靴を前の方に突き出している。人々は迷惑そうにそれを避けて立っている。なんと無頓着な青年だろう。

一列乗車励行、と大きな字で書かれた札が下っている。「御乗車なさる方は、番号札の前に一列に列んでお待ち下さい。一列乗車励行を実施致して居ります。列外から割り込んで乗車することは止めて頂きます」と盛んにスピーカーが叫んでいる。三十分程前からかなりの乗客が番号札の前に列を作っている。もう列車がホームにはいって来ると思われる頃、数人の学生がホームにやって来た。「随分列んでいやがる」「おい、後に列ぼうや」「馬鹿、そんなことする必要ねえぇ」「此の列車はな、ホームに入って来たって番号札の前にうまく停まらねえんだ」「ごだごだしている隙に乗っちやうんだよ」列車が這入って来た。成程その通りになった。列にはいって待っていた私はとうとう座席を取れずに終ったが、例の学生達はちゃんと座席に坐っている。而も後から来るんだと言う友人の為に、二つの座席を余分に占領しながら煙草を旨そうに喫んでいる。なんと狡猾な学生だろう。

此の頃、しきりと道徳教育と言う言葉が抬頭している。我々が子供の頃には、修身という言葉で人のふみ行うべき正しい道を教えられた。百年前には儒教が人の世のエチケットを指導した。その教えが明治、大正、昭和と長い年代に亘って人々の心の中に浸透して来ている。謙譲、尊敬、献身等の言葉は今の若い人々には理解出来ないかも知れないが、すべて此の教えから生れ出たものと解釈出来よう。人のふみ行うべき義理、即ち人のふみ行う正しいすぢみちに就いて、孔子、孟子が考えたことを我々の取るべき行として教えられた。その良否は別として、当時の世相は、そうあるべきことを要求した。だから我々はなんらためらうことなくそれを学び、それを実行して来た。而も子供の時に教えられた事々は心の一部となる。これに反する言動に当ると反発を感ずる。

今、時代は何を要求しているだろうか。若い人々自らが考えて頂きたい。自分達の手によって時代にマッチした道徳を作って頂きたい。社会人には社会の、学生には学生の、ふみ行うべき正しい道があるに違いない。中国は孔孟の徳義を、欧米諸国はキリストの徳義を、今なお遵奉している。世界を相手に戦った日本は、敗戦と同時に生れ変った。胎動の時期も過ぎて、そろそろ呱呱の声をあげる頃だ。若い人々自らが強い自覚を持たねばなるまい。

隨想

教授
飼養学研究室　海塩　義男

自分の子供に対してさえ、教訓めいたことを言った後では、いつも後悔することばかりが思いだされる。岡目八目とはよく言ったもので、これほど単的に人間生活の機微をついた、名句はすくないであろう。今更説明するまでもなく、自分が勝負に夢中になっている時と、盤側にいて人の打つ碁をみている時とではどだい棋力に差がついてくるのであるから不思議である。きっとこれは、勝負にこだわらず虚心坦懐な気持で、全盤の帰趨をみることができるからであろう。われわれの日常生活でも、自分自身に向ってこの眼をはたらかしていられるならよいのだが、なかなかそうはいかないものである。

年をとると労事に「静か」なのが一番嬉しくもあり、楽しくもあり、尊いとも思う。

「よく見れば、なずな花咲く垣根かな」
（芭蕉）

目立たない、なずなの花が静かに花を咲かせている。どうも人前に出て表だった目立つようなことは苦手である。自分の人生もひっ

そりとした、静かなものでありたい。と言ってこれは決っして引き込み思案を礼讃するわけではない。自己反省はがたがたとせわしない時には、効果的にできないものである。

動中の静、忙中の閑、と言うこともある。一寸したそう言う隙間を利用することによらなければ、この頃のような世の中ではできない相談かもしれない。

昔の学生々活と、今の学生々活を比較すると、いろいろの点で相違があることに気がつく。その一例を挙げてみると「学生アルバイト」である。昔は「学生アルバイト」をやっていることは、苦学生として同情されたものである。ところが、今では一種の流行とさえなっている観がある。勿論学資を得るための真剣なものもあるだろうが皆がやるから、小使が少しでも入るから、等々でどっちかと言えばやらずにすむ人までやっている状態である。切角学校に入りながら学業に差し支えるまでにやるのでは、本来顛倒も甚だしい。学生時代から世間を理解することは必ずしも悪いことではない。修養にさえなると思うが、どこまでも節度は守ってやるべきではないだろうか。

四年生になると卒業論文のことが気にかかると思う。卒業論文の目的とするところは、一つの課題について、まとまった考をつくり上げることの練習であると思う。このことは学術的研究の分野にあっても、実社会における諸問題に対しても同様であって、必要な訓練である。それであるから徒に高邁な問題をとりあげる必要はないと思う。要は如何に整然と問題が処理されているかと言うことが大切なのである。

また卒業論文は、数名が協力して作成すると言うことも大切である。これからの世の中の諸問題は決して単独では、なしとげられないものが多いのではなかろうか。勿論一人の天才が出て問題の解決の端緒を作ることもあり得るが、チームワークによれば解決のスピードに、知識の結集に便であることは言うをまたないであろう。

「なせばなる」

講師
繁殖学研究室　一戸　健司

私は幼稚園当時から、「僕は大人になったら鶏の学者か動物園の園長になりたい。」と言って、よく両親や叔父達を笑わせたものです。

事実、大臣、元師が、子供達の夢であった当時とすれば、およそ奇抜なものだったにちがいない。農大に合格した時にも、「あのお父さんの息子がね。」父を知っていた担任の先生はいとも不思議そうに首をかしげたし、又卒業後一年で、厭になった会社から女学校に勤めを変えても、「若い人」（石坂洋次郎原作）の今様板にも三年程で厭気がさし、その後は同僚や経営者からの中傷でずい分苦労しながら、何んとか曲りなりにも漕ぎつけたところをみると、余程性に合っていたのかも知れない。

然しその苦労たるや全く「ゾッ」とする程深刻なものだった。

八時二十分迄に登校するとなると、逗子に住む私は、どうしても六時半には家を出ねばならず、四時迄は用がなくても職場に拘束される。さてその四時を過ぎてからが大変である。当時どう言う訳か、私は人一倍多くの役を頂戴し、多い時には一人六役、従って週に一度か二度は必ず会議で遅くなる。農大に二度は、かけつけて学生達のゼミナールや実験指導をする。又その研究費稼ぎに日曜を含め三度はアルバイトで潰れる。こんな次第で帰宅は十二時近くなる日が多い。従って原稿書

きや文献調べはすべて職場の空時間を利用した。こんな生活が数年続いたからたまらない。元来体が弱く、その為東京の家を処分して湘南地方に住みついた位だから、一度等は「死の寸前」迄追いやられた事もあったが、気が張っていたせいか、この時も十日程で医者には無断で実験室に通って何んとか切り抜けた。

こんな生活に耐えて来たせいか、君達をみているとなんだかたまらなく歯がゆくなる事があります。立派な体格と若さに恵まれながらどうしてやってみる気がないのでしょうか。こんな私でさえこの年になって出来た事が、どうして前途ある皆さんに出来ない筈がありましょうか。私は「なせばなる、ならぬわ……。」と言う諺を皆さんに、今一度噛みしめて頂きたいのです。

畜産振興に託して

講師畜産経
営学研究室　砂川　泰夫

数年前から畜産振興を成長財として政策に実動的農家の生産部門に取り上げられるようになって、畜産関係者は元より多くの人々から、その動向が注目されて来た。ここ数年来の実積は、必ずしも期待通りの成果とはなっていない。なぜだろうか。近代生活に支配的である、近代食品の粋を集めたとみられる畜産物加工品の消費の増大、これに対応する生産物の急増をうらずけとして拡大に次ぐ拡大、増産に次ぐ増産が行われても必ずしも、その有利性は認められていないのは誠に遺憾に耐えないものがある。その原因が国民所得の上昇が、国民経済成長率の停滞ないし、横這の動向にあるのか、あるいは食生活の近代化に、それ程マッチしえないのが、それとも流通関係の不手際か。あるいは弄放的、投機的畜産意識によるのか。

将又主穀作経営の絆をたち切る事が出来ないのか、兎にも角にも、現行畜産の動向は必ずしも、成長財的有利性が把握されていない。ところが昭和三十八年度新施策として、又々畜産振興長期計画が発表され、特にその計画内容を見ると、驚異的数字の羅列式内容がみ受けられている。しかしながらそれらの内容を慎重に考察すると、ある種の消費予想の上に組立てた可能性の最大限界の上に、網羅的増大傾向が認められるとしても、特に酪農及びブロイラー生産に重点が指向されたことは、これからの農業構造を改造する重要な方向づけが窺れる。素より畜産が過去の随伴的経営所産から脱皮した、新しい生産技術と経営技術との中で新しい展開構造が見られなくてはその意図の成果も期待できないばかりかその中心をなす畜産関係者、特に畜産技術者の双肩にかかる重要性が発見されるので少くも関係者は研賛と実効的指導とによる体当りがその問題解決の鍵となるものと信じている。こい願わくば本年度卒業される畜産学科諸君に、期待する畜産人としての心がまえ、高邁な技術等この畜産振興長期計画の新しい路線の目的を達成する様邁進して欲しい。

家畜と畜産人

日本ホルスタ
イン登録協会　高橋　正

食べさせただけ出させる、これが畜産人という支配者が家畜という生き物に求めている条件だ。食べただけ出す、一寸きたないようで申訳ないが、乳牛は食べただけ乳を、肉畜は肉を、鶏は卵を出さねばならない。

ところが人間は食べさせ、与えたもの以上を心中ひそかに大いに期待し、また如何にして安く少量を与えて産物を多く出させるかと貪欲をむき出しにして日夜苦心惨担してい

る。人間社会の経済性に家畜も拘束されているわけで、合理的とか科学的とか理窟づけられ、安上りの飼料で乳を搾りとられたり、卵を一ケ産むためのエサを計算され、自分の動きを制約されて身動きならぬ箱の中にとじこめられて食べては産み、食べては産む機械となる。その上、死して後己が身はひと様の食膳に供えられるなど、誠にもって有終の美を飾る。最底コストの食を与えて最高の産物を得る、経済動物と称される家畜はこのために養われている。これでいいのだ。家畜に嘘はつけない。ごまかしなどは絶対出来ぬものである。そのうえ経済動物だくれぐれもあだおろそかにごまかしなんて考えない方がよい。家畜の経済性を高めようと真剣に取組んできた畜産技術者の合理的、科学的手段により（愛情でもって）家畜はその産物を間違いなく出してくれる。食に加えて、人間は家畜の育種に取組み間違いのない立派な経済家畜が繁栄するようにあらゆる手段をとっている。これまた素晴らしいことである。選択出来るだけ選択された優秀なる種おすの造成など重要この上ないことである。（人間社会に万が一これが行われたら……随分と無獣なおすが生きていることに……いや、人間さまはまた別の役目もあることだから……）とにかく育種、飼養管理などと苦労の末、現今の畜産ブーム、いいことだ。よい家畜がふえて、産物がまたいよいよ増大する。今度は如何に上手にその産物を消費するかだ。愛情と養育への返礼の品々はすべて暖かく受けとり捨ててはならない。この産物の流通でまた頭を痛める。食べ残しなどなくよく消化することは食生活の向上のみではない。ひいては人間社会の繁栄、福祉に大いに貢献することになる。家畜と畜産人の使命たるや大なるとすべし。大いなる博愛産業だ。家畜達よ！お互に持ち持たれつだ、うらめしそうな顔をせず潔よく死してその肉なり皮を残すことだ。なめるが如く可愛がられて殺される、しかし、これは愛情への報恩なのだ。人間社会にあっても同じ人間の善意をくみとることの出来ぬものが多いのだが。宇宙に人工衛星の飛ぶ現代に馬鹿正直な家畜とともに永々と地に這って苦労している畜産人、こんな人間の生き方も必要だ。また、これらの人種はとくに土性骨のある、種属でして……それが故に、ささやかな動物愛に甘んじ感動するのだろうが。機械文明の中にあっても人間の善も信じ、たまには脳のしわもふやしながらたくましく前進を続けたいもの。

男の成長

畜産
飼養学研究室四　小野　竹一

現実の生活の中で、男子学生とそれを終えて社会の波の中で泳いで居られる方々のことを考えてみる。大先輩の御方は今の学生のあれはなんだ。男か女か区別がつかない。よくみて見ると足もとは男であって身に纏ったものは女物同様のものだ。それに頭の毛にも判別に困る。一体どんな世の中になっていくかわからない、と非常に嘆いて居った白髪の大先輩の言が次から次へと流れ出て来た。その時を想い出される。これは私が今学生であるから学生の味方をするのでなく、あれはああでも真の男らしさを失っているか、どうか正してみた経験の御方がいらっしゃるかどうかと言うことが、私の疑いとなってくる。目で見て判断する。これは誰しもそれ意外にはあるまいと、一言で片附けて了うであろうが、そんなもので今の社会に生活する学生はどんな事を考え、どんなことをしょうと考えているか、直接そのような意見を伺って見た御方は、少ない様にも思われるのである。外形は

女でも男は男であって真の男らしさは失っていないと思う。

そこで私は、その白髪の大先輩にこのことについて、こう話をしたことがある。男には貴方様にもこうした、若い躍動する青春の学生時代はあったことは疑いのないことで、貴方様方の青春には、忠君愛国とかを、立身出世とかの心の拠と言うか己の自動の総てを支配するものの条文があって、日夜それに徹し束縛され、真の自由も権利も認められず、只義務のみを強いられ委縮した、青春だったと言いたいでしょうし私も又、そうであったろうと推測はしている旨を話し、次に今の学生には、昔乍らの学生気質は何かにつけ、貧弱であるが、その判別因難な学生に関して言うなれば、只それをそうして満足し、そうした雰囲気を作り己の喜びを得る為に懸命であるのだと思うし。それが社会の秩序を混乱する程流行したならば困るであろうが、そんなことはあるまいし、そうもなってないから、次のような私の自論を言わして下さいと言って言わして戴いた。それは男は或る程度の距離をおいてものをみ、そしてそれを事実に基いた尺度で判断し、その判断に従って行動する客観性をもっていることが、あれはなんだ、と言われる判別因難な学生であっても、その他の学生であってももっていることを主張した。私はそこで大人達はものを考える、そして判別するには、それ自体が善と、真と高貴とにかなうかどうか、すなわち値があるかどうかを規準にして、物を見る客観性が、眼で見て行動を律しているか、どうでしょうと問うたことがある。それについて第一印象で、悪いと頭からおさえられた経験をもっているこうしたことは、一度や二度話の中にでた事があったと思い出せる方が居ると思う。

こうしたことを善悪を、主観的でなく客観的に感情に入れず発見できるようになったら、男は男らしい見方、なし方が出来るのではないかと思われる。それができない時は、お互に精神の鍛錬を積むことであると今は思っている。只ここで男らしさの本質を自論で申すなら、本能や欲望を抑制して、これに秩序を与え自制の根本的態度があったのが真実男らしい本質的要素をもった男らしい男であることも附加しておくことにする。また男には類のない信頼感をもたせることも肝要である。それには強靱な精神力、約束や決心に対する信用、責任ある行動、こうしたものは一般に自己鍛錬により成り、保られるものであると思う故、青年に達した者は、今更これをこうするとか、決めたり誓ったりせずとも完成されて居ると思いますが、一度反省し将来を目されることも良いではないかという気がする。男なら業績も論じ合わなければならないではないかと思う。上述のように反省し決めたり誓ったりする計画をたてただけで満足したり試みを試みに修ることなく生半可なものとが一時的、断片的なもので中断したり、緩みをもったりせずに完全な成遂を目指し、その業績を今の使命に満足せず、更に将来に働きかけて完璧に漕入する努力が要すると思う。

青年である男らしさには、修得と鍛錬の速度で将来立派な社会人としての業績を造りそれには、実行力を振い起し未来に対する喜びを呼び覚まして、常に忍耐し恒久的、不滅の成集をなし遂げる男の持性、真実の男らしさを貫徹し、全き成長を目標となすべきではあるまいか、私は最高学府と言われ胸を張るのは、まとめてみると、客観的にものを見るだけの精神的成長、本能や欲望に節度をもつ、自制と強固な意志と豊満な気質、不撓不屈の努力と鉄壁をも破る程の信念で貫く実行力の産物である業績。

以上の三つ四つの言葉で、男としての根

性、土性骨が構成されるべきものであるのではないかと思う。女性教育の主眼は精神的母性の育成であると思われる。女は弱いが母は強いと言う、男は強健で強靱、且民主社会の骨格の一部になり基の効を成さねばならないと結論したい。

落農日記抄（酪農日記）

「父兄寄稿」

群馬県　栗原　正次

敗戦の虚脱状態より未だぬけやらぬ、或夏の夜半「最早心配無用だよ」と最近酪農熱に浮き浮きしている、隣のAさんの声今しがた、僅か二石の生乳取引契約をM乳業とすませた帰途である。農事組合の作付出荷割当を了えて、表え出合頭に私のきいた言葉である。何とか生きなければと懸命に、此れからの経営を真剣に考えている矢先、河川沿岸の土地畜産えの結びつき、暗夜の燈の様な感がして、早速酪農への第一歩を踏み出したのである。それより先輩達の指導をこい諸先生方の著書をよみ、講話を拝聴し、精進した。効果あって、やっと乳牛の数も増加し、どうやら村でも見られる様な酪農を営む様になり、Aさんやkさんと並んで行けるまでになった。十年間順調にのび自信もついて来、お互に励まし合い研究し合い、近隣にもぼつぼつ飼養する農家も出来、我々をぬき出ずる許りの元気のよい者も出て来て一時、大いに酪農熱がもり上り、経営も安定の方向へ確実に、歩み始めたのであるが、社会の変化が我々の考えより一歩先に、背後にしのびよって来たのに、一寸気がつかぬまま突進したのが運のつきであった。我々の属する集乳所は日量百石を突破する勢にまで発展した、確かに酪農天国であり、他を圧するものがあった。しかし、平坦地しかもT市に近い、交通至便の土地T市の大工業都市へ一大飛躍、なんとしても対岸の火尖視す訳には行かなくなったのである。我々の頭上に巨大の如くのしかかって来た。その怪力非力な農協ではなんとしても抗すべくもなく、如何に農民は農協へ結集すべしと号令は下っても、振り向きもせずT市への流出はおびただしい数にのぼったのである。現に私の属する新しい合併自治体F市では、年間五百人の人口減を統計的に示して居るのである。労働人口の極端なる減少、しのびよる農業政策の変化、脚下の営農では飼料作物より有利な作物なんかを、作付してもよく出来徒に、乳牛を飼養せずとも立派に経営が出来る状態、蚕にして然り、蔬菜にしても然り、ましてやれ、田に於ては局更である。

近代化へふみきる為に、又よりよき酪農家になる為に、一時のびてきた酪農を一時的にしろ、やめて基礎をきずかなければならない様な、現状になったのである。利へ農業所得と農家所得との似て、非なる農業政策用語が又、他産業との格差が近郊農村だけに切実に身にしみて考えさせられ、根本的に私達の営農の中に遠慮なく、単刀直入にやって来て、再び私達を以前敗戦直後の混迷状態に追いやっている様な、割りきれない気持になったのである。私を含めてAさんもKさんも同様、今や寄る年波と社会の荒流に、最後の抵抗を試み次代に期待かけ意気消沈涙をのみつつ、酪農と決別しようとしているのである。我々の営農は、やがて冬眠することでありましょう。然し冬芽はしっかりとだいている心算です。やがて春来りなば冬芽は何れ故郷の土地でなくとも、何れかの土地で、のび立派な花をつける様期待しつつすき間風の入る、炬燵に、一人わびしく筆を取った訳です。二百米距って放射線中央研究所の敷地が見え、国道は現在村の北部を走っているが、南部へ新設

予定（測量ずみ）新設工場のミキサーの音が、国道を走る自動車、普通列車より準急以上の列車運行の音が、間断なくきこえてきて、新駅設置、T市合併の伴奏も遠くの方できこえて来る所です。

民話と雑感

畜四　片山　洋

何か心の痛みを載いて旅行し、土地土地の風物を見る時には、その日は曇って何も見えない。健康な人が風景を見る時、始めてその美しさを見ることができるものである。従って病気の人は違った見方をするはずである。

山からの帰り路に部落に泊る事は楽しみである。その一つには、そこの人間が伝えている土地に大きく左右されている作法に従うことであり、そこの人達との会話であり、人柄を知る事である。もう一つには、食う楽しみである。あるだけの材料を最高限度に発揮した、新鮮なものの味は、それが何げなしにうまいということである。それは彼等にとって生活に足したものであるに違いないが。他の所から来た者にとっては、一種の特異さを感じさせる所までに達している。山の人達は何かと面白い話を持っているものであり、それは民話と呼ばれている。それは大抵誰もがどこかで、読んだり聞いたものに近い筋書きである。その土地の言葉に直し、土地の山神の名を取ったものであることが多いし、新しい掘出しものは少ない。大きく見て日本にある民話は民族が違った、他の大陸にもあるもので、このことは人間の由来を知る手段ともなっている。しかし竹取物語等はそうであっても小さな部落等の民話は、それぞれ独立したものである。山の名前でも色々と面白いものがある。それはその山がある地方に因んだものである事は衆知のことであろう。大まかに分けて各々一つ例を上げてみれば……

山神に由来するもの（穂高見命を祀る穂高岳）地方の習慣に由来するもの（白馬岳のしろは田の面のことで、田植の季節になると安曇村からは山の一部の雪が消え、山肌が黒く現われ頂度その形がしろをかく馬に似ているという）山神とも関係があるのだが、山の伝説に基くもの（大男が山頂に木を植えたところ唐松岳）方言から出たもの（北海道の山は大抵アイヌの伝説があり、彼等の言葉でもある）又山神から派生したものと思われるが宗教信仰から来たもの（出羽三山）そして人の名前に依るものもある（はっきりとした人の名前ではないのだが、男の名を代表するような太郎岳等）それから単に山の形からつけられたものがあり（槍ケ岳）高いから高山（たかやま）と名があるように目印に過なかったと思われる等、種々ある。未だこの他にも分ければ分かれると思う。これがそれぞれ一つの民話に繋るものである。

何れにしても、大学に入ってから山歩きをした僕はそれまで海にだけ興味を持っていたに過ぎなかった。これは清水に生れ育ったので自然の成行としても、やはり、海の魅力に誘われたのである。始め海洋少年団に入り、白の帽子をかぶることから始まり、商船大学の人達と友達になって高級船員に憧れてみたりした。高校に入って物理化学ができなかったし、それ以上に目が悪いので商船大学を諦めた僕は、大学に入り頃度その頃の山岳ブームに便乗して山に行くようになったのである。そして頭初はやさしい山へ行く事で足りていたのだが、それに飽きてきた時、岩や沢はできない相談であるし、何か一つの所に集中して自分なりの結果を得るのも面白いだろうと思った。そこで何が面白いかを選定した所、あまり人がやっていることでもと思い。その頃読んだ柳田国男の民族学のことを書いた〝山の人生〟に刺激されて民話とか地名などの地方の地方らしい所を見てみようと思ったのである。そして選んだ地域が尾瀬地方とその向うの桧枝岐である。ここは全ての歩ける道は歩いたし、部落にも泊ったことがある。

先づ尾瀬という名の起原は「生う瀬」という言葉から始まったという説がある。これを解釈すると草がぼうぼうと生えていたからだというのだが、今のような尾瀬ケ原ができた以前は一面が沼であったことが明らかであり、これは尾瀬ケ原の下が泥炭地であり、これが干上って地塘ができたのであり、従って浮島がある原因でもある。又尾瀬沼が段々と水が少なくなって湿地帯に変りつつあるのも、いづれ尾瀬ケ原と同じようになるだろうと、学問的に証明されているところからも、この根拠は薄い。又「生」が「尾」に変るところは漢文で同じ発音の語は変り得るので特別に「尾」の意味はないと思う。増して治承四年八月七日に渡部長七唱に依る南会津郡栖原村大字水抜の高倉山にある、高倉神社の社記に依れば、人皇八十代高倉院一御宇治承年四秋に書いてある尾瀬中納言云々という人の名が出てくる。ここから出たという説もあるが、そこまでは調べたことがないので、はっきりしたことは言えない。又ヘブライ語から出たという説もある。これは日本古語がヘブライ語に相通るとして、尾瀬の名を当はめると、ささやき ot (oto)＋あふれる Seph (Sefe)＝otseph＝溢ふれ流れる＝尾瀬というのだが、残念ながら僕にはこの言語学的な解答には見識がない。もう一つ稲が早くできるので早稲からという説もあるが、尾瀬では稲はできないことが分っているので、全く立消えてなくなっている。尾瀬の山については、その盟主燧ケ岳は火山である。名の由来は会津檜枝岐の方から見ると即裏燧は、昔かじ屋が真赤に焼けた鉄を鍛る為に使った道具と似ているのだそうだ。又至仏山は小至仏と共に字の通り信仰の山であったらしい。又尾瀬ケ原の西にそびえる景鶴山は奇怪な岩が頂上にある。利根郡村誌には尾瀬城壘として次のように戴っている。

戸倉村ヨリ乾ノ方四里余ニシテ、景鶴山ノ中腹ニアリ。天然の岩窟城壁ヨナシ、牙城ニ均シキ所方壱里余ニシテ、稍降リテ平担地東西二ケ所アリ、徒属一住セシ所ト云フ以下略

しかし尾瀬中納言と共に大して重要な位地でもなし、それだけの物があったかも不明である。

檜枝岐の話しに移ると……

今ではラジオの普及や電気のある所には殆んどがテレビがあるように、いわゆるマスコミの発達が地方でも言葉は標準化されて来ている。しかしそれ以前交通というものが、人の脚にだけ頼っていた

時代、戸倉から檜枝岐にぬける道が沼田街道として足繁く通っていた頃の昔話を……

昔々のことです。或る夏の日のことです。ジイサマは一人で一生懸命に草をむしっていました。そこへ一人の虚無僧（徳川時代までは敵打を美徳としていたので、幕府は虚無寺といって寺社奉行の直轄の寺を置き彼等の衣食住をまかなっていた）がたづねて来ました。オムラ（誰かの意味）居るかと声を掛けたそうです。ジイサマはオムラ（娘の名と感違いして）盆になるので隣り村へ泊りに行ったと言ったそうです。そこでジイサンお前そこに居るのにキョウウナル（馬鹿にするな）と言ったら、ジイサマは、今日来るか明日来るか分らぬと答えたそうです。

こんな昔話が伝わっているのが檜枝岐部落である。桧枝岐部落は名前からして、会津の秘郷であるし、ソバがうまい所でもある。ヌマタギ（山岳宗教に凝り固まり、獲物は山神からの授かりものとして敬り、酷しい狩人作法を守って生きて来た東北地方の特殊な伝統を持っ狩人）の現在する最南の部落であると言われている。又平家の落人の部落だとも言われているのだが、これは歴史的な証明がなされていないし、平家の落人だという風に山の部落の人達がハクをつける為に宣伝したのではないかとも考えられる。何れにしてもソバがうまい所である。こんな所は農業から見れば全く土地は冷涼で瘠せてい手て、もつけられないような桧枝岐川の谷合の部落である。

こんな部落に長い間住んで来た人は何を考えて来たのであろうか。昔からの伝習に従いソバを作り粟を喰ってひっそりと部落だけの治安の中に平和に暮して来たのだろうか。しかしそれも今ではダム工事や大規模な河川工事で女の人それも初老の婦人が、コンクリートミキサーに箕で砂利を運んでいる姿が見られる。段々と変りつつあるのは時代の発展に共ない非常に良い事であるのだがそれが部落の人達の現金収入として、増して女の人達までが日雇をしなければならなくなった時、昔の話や、習慣や白木の美しい桶作りの技術はどうなって行くのだろうか。現在は唯一家爺さんが默々と作っているに過ぎないのだが……。

「道」

畜三　Y・K

一　目の前の真直ぐな道
　　どこまで続くのかわからない道
　　朝、この道を歩く、東の空に朝の太陽が
　　すがすがしくかがやきこの道を輝らしている
　　まるで僕の人生が開けていくように

二　昼、この道を歩く、頭の上に昼の太陽が
　　ぎらぎらとかがやきこの道を輝している。
　　まるで僕の人生の最良の日のように

三　夕暮、この道を歩く、西の空に夕暮の大陽が
　　真赤にかがやきこの道を輝している。
　　まるで僕の人生が終るかのように。

正直者は馬鹿をみる

畜四　森井正彦

学年末試験でいつも心に感ずることは相変らずカンニングが横行していることである。試験とは理解の確実性を験して学業成績の優劣を決めることなり、とある辞書に書いてあった。実際にこの意味の通りに実行されているだろうか。小生疑問の念を抱かざるをえないのである。カンニングの手段として机、教壇の横、小さな紙、手の指やエンピツ等に書いて行うのである。大胆不敵と言ってよいのか。或いはずうずうしいとでもいうべきだろうか。ひどいのになると試験の答案用紙を二枚もらい別の一枚を教室の下の窓から廊下にいる別の人と馴合いになり、その人に答をかかせ、それを又前と同じような操作を行い、試験の答案として平気で提出しているのである。これも試験監督の怠慢であり、強いていえば我々試験を受けている者の責任でもある。少しでも良い成績を取ろうとする為にあらゆる手段をこうずるのである。良い成績を取りたいという欲望は誰でも持っているのである。

何故カンニングしてまでも良い成績を取らねばならないのだろうか。真面目に勉強して取った「優」とどちらが「優」としての価値があるだろうか。実際に真面目に勉強して「可」を取り、カンニングして「優」をもらうのも少なからず存在する現状である。真面目に勉強して試験を受けたものとカンニングして試験を受けた者とが大学の試験に於いて同等に扱われていることに怒りと矛盾を感ずるのである。小生も試験を受けるのがいやになることが度々あるが、受けなければ追試手数料として金を取られるし、卒業出来なくなるのでやむおえず受けているのである。自分の心にもカンニングしてやろうという意志が自から涌くのである。カンニングするというこの人間社会の中で一番醜態な卑怯な不正行為をすることがする者にとって英雄的な行為であり、寧正しい行為であるのかの様に解釈しているのではないだろうか。試験前にパチンコへ行ったり、映画へ行ったり、マージャンをしたりすることは決して悪いとは思わない。ロクに勉強もせず、カンニングして自分だけが「優」の数を多く取り、将来性のある大会社に就職することが唯一の目的なのだ。今まで一年間学んだことが成績表という三〇円の紙ペラに「優」、「良」、「可」、「不可と」いう字でもってサインされるのである。この紙ペラによってその人の四年間のすべて学んだ実績が評価される唯一の証明書でもある。又カンニングという不正行為を注意するものが非常に少ないということである。

このことは電車の中で禁煙なのにタバコを我が物顔で他人の事も毛頭考えず、ただ自分だけが吸いたいという欲望を充足する為にすっている者を傍観し、注意しない行為と同じ事である。この様な不正行為を許す事は我々或いは小生もカンニングの共犯者となるべき立場におかれてしまう事である。我々同胞の学問の真理深求する場、悪くいって社会の高い地位に出世する為の肩書の製作場、即ち学問の最高学府で学ぶ賢明なる諸君のすべき行為であろうか、我々同胞は倫理的理性的な立場に立って大いに反省する必要があるのではないだろうか。結論的に言えば少くとも真面目に試験を受ける者は馬鹿をみるといえる。即ち要領が悪いことであり、カンニングする立場の者からいえば馬鹿正直だと嘲弄されるのである。時々正直という言葉に疑問を抱くのである。この様な不正行為や人間社会の日常生活に於ける身辺から不正行為を粛正する意味で学問の最高学府で学び、若さと教養があり、しかも叡智ゆたかな諸君は勿論のこと社会の人々一人一人が怒りを持ち、公徳心のある行為をする勇気をおこさねばならないと小生痛切に感じた次第である。以上自分の思っている見解を述べたまでである。

「学歴の不平等」

畜二　大賀四郎

私達は十九年か、それ以上の年月をへて、農大に入学しましたが、この間に多少の経験をし、幾らかの思考力も得て来た事と思います。この文章は私達の身近な問題を書いたものでこの事を何んとか主義等と言う事で書くのは出来ませんが、とにかく私の考えを書いて見ます。私達が中学、高校をへて現在に至る間、私達友人の中の何人かは中学で又何人かは高校で実社会に入り勤労の毎日を送っています。そして大学生は卒業後幾年かの後には彼等より高給を取り、彼等よりも将来に希望を持ち得るだろうという事は現在の社会常識であります。

この点について私は今の社会に不合理があると思うのです。何故かと申しますと、確かに大学卒業生は彼等よりも、応用的能力とか技術面でとか、或いは思想において或る程度秀れているかもしれません。だからと云って、彼等も又人の子であり人間である事に変りはありません。大学卒より低い環境に何故あまんじなくてはならぬのでしょうか。民主憲法に於いては、教育の機会均等をうたい、文化的生活をする権利を国民に与えています。にもかかわらず、この様な不合理が生じるのは一体どうした事でしょう。これは一般に学歴というものが、その原因になっているのです、すなわち大学卒業という学歴が物を言うのです。しかしその大学入学は只では出来ません、全ての条件が揃って始めて入学出来たのであって、これらの条件の中学的能力は勿論ですが先づ第一に健康それから家庭の状況等経済的条件が揃って始めて入学が可能になるのです。「いやそうではない、俺は色々の困難に打勝って入学を可能にさしたんだ」と言われる方もあるかも知れません。私は其の様な人には只、頭を下

げるだけです。しかし其の様な学生が現在の大学に何割いるでしょう。微々たるものにすぎません。と言う事は中学、高校出の人達はそれらの条件の中、何かを欠いていたのにすぎません、それならばこの条件を欠いた人達が又実社会で条件の揃った人達の下口位置する事はどういう事でしょうか、結局彼等の大部分は自分の身分に何んら責任がなく、生れて気がついた時、やむをえず受取った環境と言っても過言ではないでしょう、この為に、立派な憲法には教育の機会均等や勤労の自由をうたっていても実際にはそこに差が生まれ、従って学歴がある故に不自由が生れ、不平等が生じることとなります。現時点から見ても、憲法第二十六条に示している様に我々は「国民の教育を受ける権利」を持っています。しかし、彼等は義務教育後は権利は持つが外的諸条件が主となって、彼等にそれをさし得ない事が彼等の将来を決定するとなればこれは見逃しがたい重要問題と言えます。

以上の様な不合理をなくす為には現在の社会制度の改善又は改革することが必要でありますが、現在の資本主義制度の下では身分差、階級差は形式的にはありませんが、経済上、実際的にはあるのであって、これを打破し、改善して行く事が現在の急務であると信じるのであります。私が求めるのは「全ての人間が平等の機会を与えられて、そこから出発し、全ての人間が持つ優越の本能の上に自分の能力を向上させて行く事で、そこに決して不平等の生じない自由で平和な民主社会を建設する事」です。

「畜友会の飛躍的発展の為に」

畜二　田中　収

如何なる会に於いても、役員諸君の努力は並み並みならぬものがあり、そこに費す精力は大変なエネルギーを用いるものである。

こと畜友会も例に漏れず、委員長以下一同、会員間の親睦会の円滑なる運営を、どのような形にして実現しようかと連日頭を悩ますところである。

従って役員は一度自分達で会の活動方針なり計画を、打ち出したまでは良かったが、会員が畜友会の一年間の事業計画に、積極的に協力してくれず、いや消極的にも協力してくれないために、活動が純くなりよって会の存在意義さえ薄くなるような状態へと、悪循環を繰り返していくように感ずるのである。

そこで役員諸君は、会員が自分達の指導に、従ってきてくれないことを、嘆げき空回りする活動が続くのである。

誠に御同情に堪えない次第である。

「畜友会」規定、第二条に本会は東京農業大学在学生、教職員及び卒業生をもって、相互親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。と明示されているが、昨年一年間の畜友会活動を見

ると、何か会が行事を消化してゆくエンジンのようなものであって、何々会と称する行事をする「行事屋」に終始し、精力を集中して、もっと会本来の目的が何であるかを、役員一同この問題掘り下げて研究し、今一度胸にじっと手を当て考えて見て、もらわなければならない必要性が十分あるはずである。

とくに相互の親睦をはかるとの畜友会の目的は、会の至上目的で、シンポジウムを開催するのは、次の段階である。

その目的の為に、単に会員親睦会なるものを開催する事で、解決出来るものではないことを特に強調して、この事を十二分に頭に入れて於いて、行動してもらいたい。

我々百二十名の畜二ですら、名前を知らない人達が多数おり、極端な話になると、顔も名前も知らない人が、多勢いるような場合が起るのである。

四人から六、七人位の小さなグループが教室内で誕生し、互に自分達のグループに入って、他のグループと接しようともせず、その日その日を過しているのである。

このような傾向の人々が何人いても、会が円滑に運営され、発展する道理があろうはずがないではないか。

畜友会会員の諸君も、己の生活を守ろうとする態度は認めるとしても、一年五百円、四年間で二千円もの高額の会費を支払っておきながら、無関心でいることは、自分自身にも損な話であり、会がより充実する為にも積極的（能動的）に、協力する必要があり、又それが会員の当然の責務であることを、十二分に肝に命じて協力すべきである。

何が畜友会に対する協力なのか、答は明白である。

自己の役割を責任もって果すことである。会員間の相互親睦をはかると言っても、事が抽象的な文句のような感じを受けるが、いつでもよい馬事公苑にでも行って、寝ころびながら、将来の事、ガーフレンドの事等、何んでもよい皆で話し合いながら、互に相手を知る必要がある。

そこで生まれる友好的なアトモスフェアこそ我々にとって、必要欠くべからざる得ない事、すなわち相互の親睦であると思う。

会員相互の友好ある状態、すなわち気軽るに楽し合える姿勢が、自然に生まれてくる、その上で事業計画なり活動計画を実行することが出来るのである。

昨秋の収穫祭を思い起すと、寒気がしてくる、あの状態だけは今年、絶対に止めてもらいたいものだ。

私は何も収穫祭の成積を云々するのではなくて、上級生、下級生、同級生間の友好あるムードが全くないこと、一部分の人達が一生懸命に動き回り、他の人々は全くの傍観的な態度であった、これぞすなわち相互親睦の上に立って行なわれなかった明白なる、証拠物件の一つである。

たとえ戦いが破れて、下位の成積でも我々会員に後悔を残すようなことに絶対にしてもらいたくない。

畜友会の歴史が浅いのも原因しているかも知れないが、我々にもっと現状を打開し良いものにしようとする努力が、欠けていることは認めざる得ない、だがそのために我々は会を自己にとって、どうしても必要な機関であることを認識して活動する責務がある。

我々は互に難くせつけ、自己を横車的に弁護する話はやめようではないか。

「理屈とコウ薬はどこに、どのようにもつく」のだ。
先ず皆んで自分の出来る範囲内ことに努力、協力して、畜友会を飛躍的に発展するよう、一点に力を結集して、互に勇気を出して、頑張ろうではないか。

研究室に思う

畜二　小野賢二

〝農業は曲り角に来た〟と相当前から叫ばれ、法人化、経営の企業化等、合理的な発展をし、なかでも畜産の成長は目ざましく我々専攻には非常によろこばしい次第です。でも日本農業は農地改革という大手術をしたにもかかわらず、自立農業が立ち遅れている点で稍々寂しさを感じます。これは食糧増産に追われていた為で、政界も非常に力を入れ、農業基本法や構造改革事業に向けられた。

しかし農民としては米の統制等についても、現状維持を望み悩みの種となっている様です。我々考えるにここに大きな問題があり農産物の価格は国際的に見ても、かなり割高であると思う。米、麦、酪農製品を除いてはまもなく自由化されると思われ、この事態を早く解決しなくてはならないと考えます。結局酪農製品が高価と言う事は、頭数が少ない上に、飼料費が高い事ではなかろうか、もっと海外より安い飼料を輸入し、拡大生産が出来る態制にもって行く必要があると考える。

又、目を世界に向け技術的にも、資本面にも改善し国際的な農業に仕立てなくてはならない。自由化が大きくクローズ・アップされた今日、安価な外国農産物がどんどん輸入された場合、日本農業は大きな社会問題になると考えられる。結局これは政府側に責任があるのではなかろうか、その例は米価保障にあると思う。もちろん政府と一体になり躍進する事は非常に大切であるが、現状で多角経営等を、呼び叫けんでも効果がなく、農業発展にブレーキをかけて居ると考えられる。

大胆かもしれないが、統制を撤廃して他の部門（畜産、園芸等）に進向させなくては、なんの進歩性も見る事が出来ない。最近は、新らしい考え方の農民が増加しては来たものの、経済政策により、他産業へと就業人口が流れて行く傾向にある。もちろん二、三男対策は解決され大いに結構です。しかし中堅ともなる青年までもが村を離れ都市で働き、又、兼業農家になりつつある状態で、協業化や共同生産が出来ると思いますか、機械による請負作業も可能になって来るが、実際に指導者となり、将来を担う人物が減少する〜〜と〜〜は、我々には一寸不安さえ感じさせられます。この不利をいかに補い、施策を講じるかが重大で、残された課題ではないでしょうか。この現状にあるとき、研究室を見た場合矛盾が生じてくると思う。それは研究の為の実験であって、なんら農業の発展や経営に結び付

いてないと思う。もちろん我々は未熟者であり狭い部分から眺めているからかもしれません。経済実験が研究室ではないが、消極的な農業に新らしい知識を吹き込む様な魅力のある実験研究をしてもよいのではなかろうか。農業関係はこれを待ち望んでいると思うし、社会人としてスタートしても非常にかわれ、世に尽くせると考える。次に最高学府である大学生活を利用して自己を生かす事が大切と思う。大志を胸に皆入学した事で、これをいかに伸ばし達成するか、これは云う迄もなく自分である。若者の特権は夢を持つ事でこれを大いに生かし先生や、室員一同には力を合せ前進するより道はないと思われるし、縦横の関係を密にし、よりよき室の空気を作り、合理的に又、積極的に問題を解決して常に向上の意欲を燃やす事が人生に最も大切だと信じます。小生は理想主義に変り大きな壁に衝突した懸念が見られるが、世の中の動向を顧みながら邁進すれば難関をも突破出来ると思う。これが人間形成の第一歩であり成長の段階であろう。一年生から研究室に通い色々な事を学び得られた事は、我ながら誇りとしてます。一見無駄な様に思う学生も見受けられるが、これは端的に見て表現したに過ぎず深く掘り下げ一考する必要があるのではなかろうか、理論と実際がマッチして農業は成立するのであり今後入室される方々にも役に立てば幸いとするところです。

貿易自由化恐るることなし

畜二　藤崎和典

外国農産物との関係上いちばん大きなのはバターなどの乳製品である。その乳製品が農産物の生産総量の中で占める割合は現在一五％程度でたいしたことはない。しかし将来の成長物なので乳製品が持っている国際競争力というものをよく考えねばならぬ。果樹野菜肉畜は大体問題ない、そこで問題になるのは酪農である、これはバターにおいて明らかに相当な差がある。ところが農乳価格としてみれば必ずしも大きな差はない。日本の牛乳の消費はシティミルクを中心にして伸びてゆくということを前提にすれば必ずしも悲観的ではない、そこでなぜバターにそんな差がついているかということだ、私は現在の国際的なバターの価格に何か問題がある様に思う、完全に自由化された場合のバター価格は現在のデンマークの輸出価格水準ではないと思う。それにもう一つ日本で牛乳価格が比較的安いのにバターが高い。それは現在の日本の酪農が非常に零細企業で集乳費がかかりすぎている、乳業会社がもうけているということもいえる。これは自立経営が集落化していけばかなり解消すると思う、それでかりに酪農を伸ばそうとするそれは米麦にかわって農家に多くの所得を与える酪農であるということが一つ、それから国際的な市場競争にも耐える様な酪農であるということが一つ、この二つの要

素を果さねばならぬ、乳業が一応確立している産業ならば殻作というものが保護されて、したがい高い飼料を買わされても乳業は伸びる、だが日本ではまだ有利産業でないので圧迫されたのでは伸びられない。酪農問題を論議するに乳価バターの価格に比べ飼料の問題を考えねばならぬ、それで集団酪農という大規模な畜産を目標にしているのに国内の飼料生産態勢というものを考えに入れた関税政策とか貿易政策を考えなくともよいのか、あくまで牛が目標でありバターが目標なら土地はどうでもよいのか、これらは経済的な問題でもあるし政策の問題でもあります。すでにバターを輸入し乳業会社は国産バターをこれにまぜてそれでコストを安すくあげている。それでないとバターはもうからない。私は自由化についてこの様に考えている。政府が楽観論を吐いているのは自由化しないでもすむという点にあるのでそれを信用するしないの問題である。しかし私は自由化は絶対しなければならぬと思う。

以上

動物か？植物か？

畜四　木田英宣

緑色に変った池の中に見られるミドリムシ（Euglena）は長い一本の鞭毛を使っておよぎ、又は体形を自由に変えながらはいまわる。（この現象を metaboly という）ので動物分類等では原生動物門の中の鞭毛虫綱、植物性鞭毛虫亜綱、ユウグレナ目に入っているが鮮かな緑色の葉緑体を多数とっていて普通の植物と同様に光合成によって炭水化物を合成することが出来るので植物学者はこれをミドリムシ植物門（Eugtenophyta）の中に入れている。

粘菌類（変形菌類 Myxomycetes）には数多くの種類があり朽ち木の上などに、白、黄、赤などの美しい子実体（胞子嚢）を作っている、この点では植物である事に疑問の余地はない。ところがこの胞子嚢からはじき出された胞子は湿地に落ちると中から単細胞で長短二本の鞭毛を持った遊走子がはい出し鞭毛を失って粘液アミーバとなり二四が合して接合体となり同様のものが多数合一し更に核分裂をくり返して、いわゆる変形体となる。この変形体には普通の植物細胞に持有のかたい細胞膜がない仮足（虚足、偽足）を出して湿地の上をはいまわる様子はアミーバの運動と全く同じであるから、動物学では原生動物門の根足虫綱の中に入れて菌虫類（動菌類 mycetozoa）とよんでいる。

この様に下等な動物や植物の中には動物と呼ぶべきか植物と呼ぶべきかに迷う様な例が少なくない、それとも動物と植物とは合わせて生物界を構成するメンバーであり、地球上に最初に現れた原始生物から二つの非常にちがった方向に進化した兄弟同志で一つの根から分かれてそびえ立つ二本の幹のようなものである。

従がって「動物」という幹の頂点にあるヒトとサルと、「植物」という幹の頂点に位置するキクやランとの区別は明瞭であるけれども根の部分にあたる下等な生物では動物か植物か区別し難いのがむしろ当然ともいえよう。

農村よ若帰れ

畜三　J・A

私は根っからの百姓育ちである。そのせいかどうか判らないが都会の雰囲気というやつはどうやら私の性に会っていないらしい。

最近東京で流行（？）しているとかいうあの空気がどうかしたとか、とにかく都会はホコリっぽい。又、山ほどの人間が死んだとか生きたとか、車どものハチ合わせとか、そしてこの雑然たる騒音、そしてどこからともなくただよう犬のウンコのような悪臭の毎日、とてもこんな中での生活などはもうあきあきした。

農村出だという私はよく同胞なはずの農民からこんな質問をうけることがある。「都会に出てしまったからにゃお前さんも、もう二度と田舎なんゾに来て働く気などないでしょうネエ？」彼はなんかあきらめたように、しかしなにかそこにおこることを期待するかのようにこうたずねるのである。私のいう文句はいつも決っていて同じだ。「いいえ。」「本当かい本気じゃないだろう？」「本当さ、帰って来てまた働くよ。」こんどはやっぱり私たちと同じ田舎出でこの都会でサラリーマンとかいう労働をやっている人物に、私がたずねたとする。するとどうだ。都会人の毛皮をかぶった彼らは必ずきどりながらこんなことをいう。

「あんなくすぶった農村なんぞにゃ帰る気などこれっぽっちもないネエ。だいたいにして今の農村はだよ……」とさんざん農村、農民そして農業の悪口を立て板になんとかのように話したあげく、こういう。「第一お前だってそう思うだろうが？」私は又言う。「いいやそうは思わないよ」こうして農村の若者たちは都会をあこがれ、農村を捨て去っていくというのである。これを彼ら農村青年と同胞の私たちは黙って指をくわえて見ていろとでもいうのだろうか。少なくとも私ならば「百姓は楽しいョ」というだろう。強がりなことをいってもだめだと笑う人もあるだろうが、実際小さい時から今まで百姓をやってきた経験のある本人が言うのだからいわせておいてほしい。

ともかくこれからの若い農村青年たちは、ただホコリっぽい都会にあこがれることなく、くだらぬレットウカンなんゾは捨て、自分たちで若い農村を見い出さなけりゃ、いや造りださなけりゃ、そして若い彼らの力が団結し協同することを覚えなきゃ、古くて、頑固でそしてインキで、くすぶった、息苦しいこの農村の壁は破られやしない。そしてこのようにわけのわからぬことを自信もないく

せに、ガタガタという私は部落の人たちから逆に悪口をいわれるしまつである。「青二才のクソボウズメ、ひっこんでいろ」――しかし事実農村は住みにくい。そして農業で食って行くことはとてもむずかしい。少なくとも若い農村青年が農村の強い柱となるまでは、でもそれまで指をくわえて待ってなんかいられやしない。今でさえもう農村は年老いたジイサン、バアサン百姓なのに、これでは農業の近代化も、発展もヘチマもあったもんじゃない。たしか私は農業を学ぶためにこの農大に来たはずだ、畜産を学ぶために、これが私にはかけがいのない誇りだ。でなかったら何もできやしないし、大きいことなどいえやしない。たとえばこんなふうに。「これからの百姓はだネエキミイ、若いやつらの若い知識と若い力とそれから団結でやっていかなきゃいけないんだよ！とにかくここで楽しく生活できるようになんとかオレ達の手でつくりなおしてみようや。」私は多分大きくはないが牧場をもつ。そして牛でも、馬、ヒツジ、ヤギ、ブタ、ニワトリ、なんでもいいこいつらとくらそう。

ヒイヒイいいながら米をつくり米作日本一はくだらない。なんのためにお前は、どうしてこの農大に入ったんだい？なぜ？そうだ何ものにもまけない百姓になるためだっけ。楽しい百姓を築くためだっけ、そして明るく陽気な牧場をもつために私は百姓に強く生きていこうと心にきめている。

決して天国ではない農村に生きようと。

畜三　栗原良雄

「数」

物理の時間、波長の計算で $c=3\times10^{10}cm/sec$, $V=\frac{c}{\lambda}$ という公式を見ているうちに、ふとある事に思いついた。それは、今までどの位の時間いや何秒間生きたのだろうかという事で、自分は、たぶん最近誕生日を迎えたばかりだから確か二一歳だ。そこで物理の先生には悪いと思いながら、ノートの端に計算していくと、はたしてその結果が表われた。

年にして二一年、月にして二五二ケ月、日にして七、六六五日、時間にして一八三、九六〇時間、分にして一一、〇三七、六〇〇分秒にして六六二、二五六、〇〇〇秒（一年間を三六五日として計算）、自分は、誕生日までで六六二、二五六、〇〇〇秒しかたっていない。この時間を地球と比べたら、ほんの一瞬にすぎない。また宇宙と比べたら……。なんて人間の命などはかないものだろう。それでもこの短い間でも生きているし進歩しているのだ。ただそのままの状態でとまっているのではない。この様に短い時間でも、自分にとっては、その内の一秒でも大切なのだ。しかし、今までそれほど大切な時間を無駄にしすぎたのではないか。

自分は、ためしにこの数を一二三……から始まって六六二、二五六、〇〇〇まで数えるのにどの位の時間がかかるのかと考えたが、すぐに頭の中に浮かんでこなかった。落着いて考えると、一秒間に一つの数を数えたとしても夜もねないで、飯もたべずほとんどこの数を数えるだけで、実に二一年間かかる計算になる。これを、友達に聞いたら、ある友達は、「一〇分」位と答え、他の友達は、すぐに答えが出てこなかった。この位、数というものは我々の身近に感じていながら、また底知れぬ魔力を持っている。また数というものは、つきる事がない。人間の命とちがって、だから数を扱う人はよほど慎重に扱わなければ大変な事にならないともかぎらない。

畜三　遠藤光路

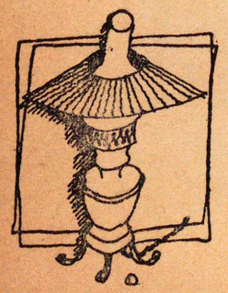
深川の鱗

僕は目黒で生れ、終戦になってから昔から下町と云われている深川州崎に育った。小学校もまだ焼けたままで、三階建の鉄筋校舎である。窓という窓はガラス等なく、当時の代用ガラスといって油紙と細竹の組合せた黄褐色をしたもので、向う側の見えない窓ガラスだった。教室も一階の二教室だけが使われ、残こりの教室は焼け出された人々の住居となっていた。窓からはいつも洗たく物がぶらさがり、校庭の前の公園は墓地の代りにつかわれ、墓でいっぱいだった。その墓地が皆んなの遊び場にもなった。火葬などではなく、ほとんどが土葬であったようである。その後墓地を掘りかえして、全部の墓を他に移したのを今だに記憶している。ぐにゃぐにゃに曲った鉄柱や、くずれた壁、ゆがんだ鉄の戸、黒くこげいやな色をしていた壁、油のしみこんだ学校のコンクリートの屏等、人の話によると人間の油がしみこんだのだという。東京の空襲で、この下町はあとかたもなくやられた。川やプールそして道路に死体が山と積まれ、負傷者の叫び声でいっぱいになったという。僕の中学の担任の先生は、この時実際に住んでいて、死人の浮いている川に身を入れ、火からのがれたが、喉が乾いてがまんできなかったとの事、しかたなく死体の浮かんでいる前の川水を何回も飲んだといっていた。煙に目をやられて、助けを叫んでいた人がわからず、その声が耳に残っていて時々思い出す事もある。又、友人は母を学校のプールで亡したといっていた。爆撃されたとき、友人の母はプールの中に入って彼を守りながら火の粉と煙にまかれて彼をかばってなくなったとの事だった。彼は今社会人として働いているが、中学の時、彼の父を亡している。歌のうまいおとなしい人柄で皆に好かれていた。学校への道は凸凹で、ほとんど家もまばらだった。

電車のレールはひんまがり穴もかなりあったと憶えている。それでも新しい家もあったし、店等もあった様に憶えている。橋のたもとには、かならずといっていいくらい墓があった。海が近く、川の

多い町で、すぐとなりが木場と云われている所である。毎朝四時頃起きて、兄貴といっしょに豆腐屋に行き、長い間列をつくって待っていて、オカラを買ってくるのが仕事だった。このオカラをオカユに入れて食べた事が今でも話の種となっている。海が近いので、アサリやシジミやハマグリ等も友達と取りにいってよく食べたものである。この時分、仲間同志でくず屋のまね事をしたり現金をもうける事をおぼえた。焼跡とか焼ビルに入りこんで、鉄くずやガラス、ナマリ管、アカ、シンチュウ等の金属類を取り出して一ケ所に集めておく。焼けた窓わくや、水道管、ジャロなど不必要とあれば小さな仲間が鉄棒やカナズチで取り出した。これらの物を四、五人ずつ集まってくず鉄屋に売りに行き、皆んなと買い食いをしたりして、小さな時からあまり良い息子ではなかったのかもしれない。冬の塞い日等は木場にもぐり込んで材木の切れぱしを集め、たき火をしたり、家の燃料等にもなった。確か電気はまだ停電のよくあった時期だったと記憶している。小学校の六年生の時分には町も学校もほとんどきれいになり、焼あとの影は校舎と僕達の住居であった焼ビルに残っている程度だったと思う。この頃は、下町の祭りもハダカミコシ、盆おどり等々も行なわれていた。

本祭りには、四十台以上のミコシが列をつくり、若い人達が上半身を外気にさらして、見物人達から清めの水を身体にあびて、元気よくかつぎまわるのは、見ていて気持のいいものだった。木場にも材木が立ちならび堀にも木の臭いでプンプンしていた。州崎には名所か不名所かわからぬ遊廓があった。大門を中心として周囲が川でかこまれ、大門のつきあたりは海に面している。この遊廓は吉原にならんで有名なところだ。よく落語などにもでてくると思う。町の人の通ずる道は大門だけで、橋がかけられ現在では、ふもとに交番ができている。昔は、そこで働く女達がにげられぬ様に川で堀をつくり、背後に海をおいて、大門以外の出入をできぬ様にしたらしい。現在これらの家は、旅館や下宿にかわった様である。一般の人も、この島の中に家をもつ人は、かなり多くあった。背後の海は、埋立地として利用され、工業地帯として発達している。海水はにごり、川はどぶの様になってしまった。それでも下町の夏祭りと木場の材木の香りと八幡様の夜店市、そして江戸っ子の気質を受けついだ土地っ子が以前と同じ様に、ミコシをかつぎ、浴衣をはしょってセッタの音をさせ、ウチワを片手に夜店をひやかし、川辺や橋の上ですずんでいるのは、本当に気持のいいものだった。その下町を離れて六、七年になるが、いつまでもわすれられない町であると同時に、下町の良さをなくされたくない様な気がする。住居となった焼ビルも二年ほど前にくずされ、あの校舎も修理され立派になっている。墓地の代りになった公園も、子供達やアベックの遊び場となっているし、にぎやかな電車通りに面していて、以前の影はどこにもみあたらない。これでいいのかもしれないが仲間の連中は、きっとまだ覚えている事と思う。



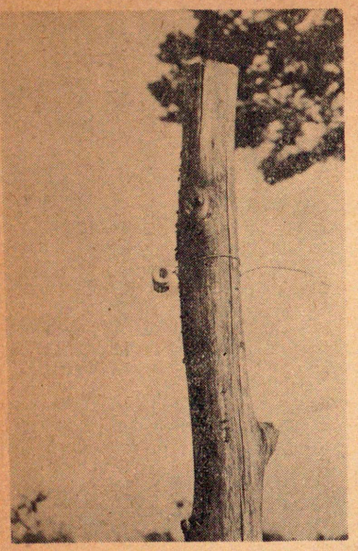
清浄な美

——牧場実習雑記——

畜三　三浦貞夫

そこは栃木県と福島県の境、那須高原を目前に控えた国道四号線と小さな村との中間にある。晴れた日には那須岳の雄大な姿が青色のキャンバスにクッキリと浮かび上がる。私達はそこの牧場に一ケ月半の夏を送った。

朝、五時半起床。寝覚めの一服をふかしながら濃い霧の中を畜舎へと急ぐ。牛を清め、畜舎を清め、放牧して帰るころもう夏の陽は高原いっぱいに注ぎ始めている。霧のベールに搾乳を終えた牛がユックリと草をはむ影を映し、草木の露がキラキラと輝く、それは冷やりとした朝の空気を一層新鮮なものとしていた。朝の勤めを終り私達は、山の四方にこだまする小鳥の唄に耳をかたむけるのである。しばらくの間、ずいぶんしばらくの間……。



あけがたのそぞろありきにうぐひすの
はつ音ききたり藪かげの道

金子薫園

牧場の朝の自然の美。きょう一日のファイトはそこから生まれる。

昼食後、一時間の休憩をとり開放的なスタイルで出掛ける牧野には白熱した太陽が待っていた。乾草を作る私達はしなだれる草のごとく、堪えきれぬ喉の渇きに誰れかれとなく梨の木に近づく、マメの出来かかった大きなその手には梨はあまりにも小さすぎたが噛み締めて吸う汁の味はなんとも言えない。緑色の香りがあり、素朴な渋さがあり、ザラザラする舌ざわりは夏の暑さに清涼感さえ与えてくれた。「これは長十郎」、「これは二十世紀」と教えてくれる彼に「紀元前はないのか?」と尋ねる。彼は子供の仕草を遠くで見ているようなほほえみを浮べて「残念ながらないんだ」と低く答えた。

町で育ったその人は牧場を見るのも、梨の木を見るのも初めてかも知れない。従順な牛と、不自然でない自然、その中で過ごす数十日その人は原始時代の住人に帰属していたのだろう。その様な粗放的自然環境に最もふさわしい質問のようにおもえた。私達はわざとらしいその人の質問を憎むことも笑うことも出来ない。答える彼もそれを知っていただろう。

連翹の花にとどろくむなぞこに
浄く不断のわが泉あり

山田あき

那須の山かげに日も沈むころ、私達は一日の作業をすませ、ペンキの臭いもまだ新しい宿舎へと急ぐ、畜舎からは一日の労をねぎらうように牛のながながと鳴く声、牧場で働く者の最も嬉しい時である。宿舎へと急ぐ足は知らず〳〵のうちに畜舎へと向かっている。黒く清んだ大きな目はどことなくうるんで、それを位置づける顔は私達に強く強くこすりつけられる。濁りのないその目に、私達は自分の姿が小さくハッキリと映っているのに時として驚かされた。

欺くことを知らない動物と、人間との愛。
私達はそこにも清浄なものを見出だすことが出来たのである。

きらきらする睫毛のかげに
柔和な眼球がうっとりと
いまにも消滅しそうになる
それから、素朴な眉間のあたり
ゆたかな黄金毛が渦巻いている。
未来をもたないこの表情の
背後に、どたっとうずくまるのは
くろい重量のある
大きな『現在』

村野四郎「牛」の一部

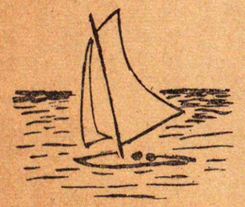
私は今この詩を読みながら、目まぐるしい東京の中に当時の思い出探をっている。

「海」

畜二　谷本克則

愛媛県に、芸予諸島の南端で、周囲数十キロの、二つの町を持つ、大島と云う島が有る。瀬戸内海でも、五指に入る急流の、来島海峡を隔てゝ、四国とは四キロ程の距離が有る。島から四国に渡る、玄関口となる。人口十一万の今治市は、島の南端から、連絡船で、約二十分。そこから、島に沿って、船で約四十分。小さな小学校の有る、友浦と云う所に着く。その、物静かな、友浦の約一キロ沖に、周囲一キロ程の九十九島と云う、無人島が、浮んでいる。我々にとって、釣などの場として、なじみ深き、この島にも、昔を夢みる事が出来るのだ。島の周囲は、四〜五十メートルの、断崖絶壁で、只一ケ所、人間一人やっと歩ける程の、急な坂道が、頂の上の方へと、断崖にへばりついている。松の大木等で、包まれている島の、頂上の方には、十数本の桜の大木が有り、春には、島の色を変える程である。その頂上は、平らな二段の台地となっている。そして、これが昔の、海賊の城跡である。今では竹が茂り、雑草が伸びほうだいで、今も尚、あちこちに、石垣が見られ、つい二〜三十年前までは、深さ五〜六十メートルにも及ぶ井戸が有ったそうである。いや、昔の土木技術も、仲々大したものである。その気になって見ると、こいつは、たしかに海賊の城にはもってこいの場所だ。大島には一キロ足らずで、食物は容易に、手に入ったろうし、六〜七キロで、急流とは云え、海の銀座と、云われる、来島海峡が有るのだ。さぞかし、昔は、島陰からさっとこぎ出しては、鮮やかに、かっさらっていたことだろう。ところが、城は他にも有ったらしい。大島の反対側の方にも、同じ様な島が有り、城跡が有ると、云うのだ、いや〳〵まだ〳〵有るらしい。昔の若人達に聞くと、これが、あの有名な村上水軍の、城の一部だと云う。方々に支店ならぬ、支城を持って、堅いチームワークを持って、瀬戸内海を、我がもの顔に、かせぎまくっていただろう雄姿が、目に映る様だ。そして、その村上水軍の城跡のある島にはどれも桜が植えられている。樹齢は約百年程か、春には、近くの島民の目を楽しませて呉れる。小舟でこぎつけ、釣ったばかりの魚をおかずに、島の上で弁当を開く時、それは素晴らしい花見となる。考えてみると、大島の人達も水軍の子孫がかなりいるかも知れないが、そうなると、自分の先祖も……。海賊と云えども、このあたりの人達は、村上水軍を自慢していた様だ。単なるあこがれか、それとも、やはり近親感を感ずるのだろうか。しかし、海賊と云っても、戦国時代の日本では、大名や、権力有る者は、これ皆海賊の様な物では、なかったろうか。すき有らば、相手をおそい、力と力でぶつかり合って、強い方が、何もかも、自分の物にしてしまう。村上水軍は、瀬戸内海と云う、領地を確保し、他国者有らば、争い、勝った時に、かっさらうのだったら、特別に賊あつかいにする事も無い様だ。そうなれば、自分も一安心だ。今も尚、海には大小の船が、数知れなく行き交う。昔と変わったのは、海賊が無くなった事だけだろうか。来島海峡には、今日も、数え切れない船が、中には、漁師の小さな釣舟から、外国航路の、数万トンもあるタンカーまで。急流にさからいあるいは汐に乗って、行き交うのである。

おわり



研究室便り

家畜繁殖学研究室

講師　一戸　健司

目下のところ実験器具には不備な点は多いが、室員一同の熱意と和によってこの難艱を切り抜け、活発な研究活動を続けている。

当研究室には目下二十名の学生が居るが、室長の平林教授が「家兎」、一戸講師が「家鶏」の専攻である関係上二つのグループに分れ、家兎の専攻者は教授の論文テーマである「喰糞現象」や「性周期」、「雌雄性」等を、又鶏を選ぶ者は講師の論文テーマである「鶏の化学去勢」や「鶏の人工授精」、「孵化率の探究」、「雛の機械鑑別」等を研究対象としているが、更に日本大学の大学院で「醤歯類の過剰排卵、人工妊娠」等を専攻している石島研究員も加わって、同技術を学生達に習得させ研究室に新風をそゝいでいる。

ゼミナールは毎週火曜日、室員の研究発表を中心に行い、又木曜日には特技習得のため特設コースを設け、何れも全室員が出席して日夜研鑽に余念がない。然し何によりの特長は、当研究室の主旨が人間形成をモットーとしている関係上、学生達は礼儀正しく節度があり、又時にはパーティー等を開いて、社会人として必要な教養も身につけさせている。

当研究室の卒業生は自営、動物園、農業改良普及員、開発会社、教師等と区々であるが、動物園に門戸が開けたのは、今後当研究室の一特長となると思われる。

今年は「卯」年、即ち平林教授の年である兎の様に飛躍しようと室員一同仕事に励んでいる。

獣医学研究室
（家畜診療研究所）

本研究室は平山助教授が室長となって、各学年に渡って室員を有しその数は約二十名程である。主として、家畜の診療、防疫衛生、解剖及び繁殖等を学ぶもので、家畜の駆虫剤増血剤、肥育剤、発育促進剤、予防薬、及び忌ひ剤等の各種薬物の畜体に於ける影響や効果をも試験している。茂原時代に於ては家畜診療所を中心として、各種家畜の飼養、繁殖等を行ない、基礎知識を習得し合せて、近隣農家の家畜の診療、人工授精及び飼養管理の指導等を行った。研究室が本校に移ってからは、その設備が不十分で、診療活動は十分出来なかったが、牛、豚、兎、鶏等の飼養管理及び繁殖等を行ない、合せて繁殖障害、各種疾病の発見、観察及び診療、解剖観察等を行ない、又、兎に於ける性成熟の発現時期の求明や、日本には、初めて入って来たタヒチ豚の生体観察や各機能の求明及び解剖学的特長、差異等を調査し品種の固定及び新品種の作出の為に努力している。現存大家畜（牛）は本学に飼育する事が困難な為に、厚木農場にて飼養管理し、人工授精技術の収得、診療、実験等を行なっている。これは農場の仕事とも密接な関係を持つものである。本年二月に本学内に家畜診療所が出来たので漸次その設備もととのい、今後の活動としては、各種家畜及び一般動物の繁殖、診療、解剖等を行ない、これらを観察し知識を得るに十分なものとなり、又各種薬物の実験、調査等も十分に行なう事が出来る。本校内に豚、兎、鶏等を飼育し、育種、繁殖、飼養、に有機的にむすびついた研究をする事である。

本研究室は、その門戸を各学科、各学年に開き、希望する総ての学生は研究に身を入れる事が出来るものである。

畜産製造学研究室

畜産四年　飯塚壮太郎

昨年六月に、農学総合研究室が完成され、畜産学科の研究室もほとんど移動しましたが、私ども製造学研究室は、いまだに旧講堂で仮住いしている状態です。

五十余名の室員は、鬼原先生の御指導のもとに各々の専攻部門の研究にはげんでいます。先輩諸兄は不備の設備にもかかわらず、四ケ年の学究の結果である、卒業論文も書きあげ、春には、りっぱな社会人として巣立ってゆかれます。

現在、本学の北門近くに、本研究室の建設が急がれています。

乳加工室、肉加工室及び実験研究室が予定され、乳加工室には、市乳処理、バター、チーズ及び酸乳などの加工機械、肉加工室には、ハムソーセージベーコンなどの加工機械（チョッパー、サイレントカッター、スタッハー）を装備し、専攻学生にとって充実した、学問の追求の場にることと思います。

飼養学研究室の近況

飼養研　多田　尚二

我々の研究室の歴史は七十年からの伝統を持つ農大からしますと非常に新らしく昭和三十五年四月、茂原分校の五坪程のガランとした一室で、海塩先生の許にウブ声をあげたのが当研究室でありますが、一歳にも未たずして生れ里を後に世田谷の本校に移転致し、これまた旧講堂の片隅から現在の総合研究室へと転々と致しておりますが、何分にも歴史が新らしきこと故、昨年までは分析器具一式のみと云う誠に心細い限りで、諸先輩におかれましては何かと不便をされた様お聞きしておりますが、しかし海塩、伊藤両先生の熱意によりまして、此度びバランス八台分析器具二式を購入致し、とかく器具等の不足で怠りがちであった実験も今後はその心配も無く我々の希望を満してくれる事と確信致しております。とかく「昨今の日本の農業は曲り角にある」等とよく云れ農業の近代化が叫ばれている折その一つとして畜産の発展こそ耕地面積の狭い山の多き我国のごときに於てこの難問を打開すべく光明の一つとして重視されて参りましたが、その畜産に致しましても多くの問題があり、特に家畜を飼育するにつきいかにして能率的且つ経済的な主畜農業経営を営むかと云った事は、飼料に関する課題の解決に迫られておる現在におき、それに大なり小なり将来関係する我々にその使命を待つ所大でありますが、幸いにしてその道の権威者であります両先生の良き指導を仰ぎ又この度結成されました「千と世会」との連絡を密に致し鞭打って戴き、飼屋の道に精進しておる所であります。

尚現在の室員は、四年十六名、三年五名、二年二名の計二十三名であります近日中に消化試験等に用いられます緬羊や、鶏等の家畜の購入される日指折待っておる次第です。

家畜育種学研究室

当研究室の構成は次の通り

室長	農学博士	鈴木正三教授
講師		田中一栄
助手		渡辺誠喜
学生室員		三十名
特別室員		二十三名
合計		五十六名

研究活動の目的は、家畜育種学の基礎的、応用的学問の追求であるが、特に当室の特色としては、家畜の育種を血液型或は蛋白の問題から追求し、血清学をその方法論として採用していることであるこの方針に沿って毎週談話会を行い、学生の自主的な考えにより出されたテーマについてのゼミナールがもたれている。また現在学外の講師による血清学特別公開講座が毎週行われ、室外の学生をもその対象として好評を博している。加えて年一回の室報の発行、特別室員との交流も重要な活動である。このように当研究室の活動は活発であり、その成果は各方面より高く評価されていると、自負出来得るものと考えている。

次に前年度卒業生の卒論テーマをあげる。

一、鶏の血液型物質の血清化学的性状について

一、鶏の血液型の遺伝に関する研究

一、暑熱の産卵生理に及ぼす影響

一、Tuvela Food (Vitamin) の雄兎及び雄鶏に対する生理学的影響。

一、鶏胚の発育過程における体液蛋白分屑の変化に関する研究

これらの実験の他、前述の研究室独自の研究、他の研究機関或は会社等の依頼実験などその活動は多方面に及び、また多くの実験動物を飼育しているため、変化に富んだ研究実験が出るなど、比較的恵まれているといえよう。

熱意ある学生の入室を歓迎します。

(印牧記)

畜産経営学研究室

当研究室は三十七年度新設になったものであり、その構成は次の通りであります。

室長	講師	砂川泰夫
学生室員		二十一名
特別室員		十一名
計		三十三名

新設研究室であるが、最近の畜産振興と応用学的近代化の路線にクローズアップしつつ、また構造改善事業にともなって、これからの畜産経営に主軸的重要学問となったことは周知の通りであり、加えて現状畜産部門の論理的応用的追求の課題山積の上から、室内外に於ける畜産経営の実態調査及びゼミナールを中心とする究明を計るべく室活動が展開されている。

これがため部門別研究班を編成し、実際の調査研究と論理的追求を計るために、

㈠ 酪農研究班

㈡ 養豚研究班

㈢ 養鶏研究班

等学年別、目的別に編成し卒業までに、部門別経営の実態を明らかにしながら論理的追求を計るようにしています。

なおその外毎週一回ゼミナールを開催し、畜産経営学の論理的研究と向上を計っております。

次に前年度卒業生の卒論テーマを上げると次の通りであります。

一、鶏の管理労力とその経済性

一、養鶏経営に於ける飼養羽数と施設装備

山羊及び家兎の母仔間における抗体の移行についての研究

昭和三十六年度優秀卒論賞

勝連紘一郎

〔緒言〕

動物における免疫抗体の移行については、母体血清中に由来する特殊な免疫抗体によって、初乳をのむことにより新生児に移行され、斯くて一次的に抗病性を得、罹病率が低下し、斃死を免れ、健全な発育をなしとげるものであると報告されており、一方、母体血清中の抗体が胎児あるいは新生児に如何なる形式で移行するかについては、ウマ、ブタ、ヒツジおよびヤギにおいては免疫抗体は初乳を通して新生児に移行され、またウサギ、モルモットおよびネズミにおいては胎盤を通して新生児に移行され、分娩時はすでに免疫抗体をもっていると報告されている。そこで著者は、ヤギおよびウサギにおける抗体の移行について、胎盤および乳の両者からこれを追試し、更に母体から新生児に移行された抗体の消長を知るため、ヒツジ血球をヤギに免疫し、また、ヤギ血球をウサギに免疫して、産生された免疫凝集等により実験を行い若干の成績を得たのでここに報告する。

〔実験成績〕

一 ヤギにおける抗体の移行について

a 胎盤における免疫抗体

妊娠三ケ月のヤギにヒツジ血球を数回免疫し、六十四倍までの抗体価の血清が得られ、そのヤギの分娩数日前の血清中の抗体価は四倍であった。この親から分娩された新生児に初乳をのませることなく、ただちにその血清中の凝集素価を調べたところ、凝集反応は認められなく、したがって胎盤を通して免疫抗体は新生児に移行されないことになる。

表 1 新生児血清中の凝集素価（山羊）

新生児番号	血清稀釈度 ×1	2	4	8	16	32	68	128
A1	++	+	±	−	−	−	−	−
A2	+	+	−	−	−	−	−	−

b 初乳における抗体

ヒツジ血球免疫ヤギの初乳中の凝集素価は、四倍まで反応した。この初乳を新生児に哺乳させ、哺乳後二十四時間たって新生児血清中の凝集素価を調べたところ、次表（表1）の通りであった。

即ち、初乳哺乳前の新生児血清に

は免疫抗体は認められなかったにもかかわらず、初乳哺乳後二十四時間においては、その血清中には二倍迄の凝集素価をもっていることからして、ヤギにおいては、免疫抗体の移行は胎盤よりも初乳を通して移行されることが確認された。

二、ウサギにおける抗体の移行について

a　胎盤における抗体

ヤギ血球を雌ウサギに対し免疫を行い、比較的強い抗体価をもたせた後、同時に交配を行い妊娠させ、これらヤギ血球免疫ウサギより分娩された新生児を、初乳をのませることなく、ただちに放血を行い、血清中の抗体の有無を調べた。その代表的な一例（表2）をここにあげる。

表 2　山羊血球免疫家兎の新生児血清中の凝集素価

区別		血清稀釈度 ×1	2	4	8	16	32	64	128	156
母体分娩前No.11		⧻	⧻	⧺	⧺	+	−	−	−	−
新生児番号	21	⧺	⧺	⧺	+	±	−	−	−	−
	22	⧺	⧺	⧺	+	±	−	−	−	−
	23	⧺	⧺	+	+	−	−	−	−	−
	24	⧺	⧺	⧺	+	±	−	−	−	−
	25	⧺	⧺	⧺	+	±	−	−	−	−
	26	⧺	⧺	⧺	+	−	−	−	−	−
	27	⧺	⧺	⧺	+	−	−	−	−	−

表 3　山羊血球免疫家兎の新生児における凝集素価の消長

区別		血清稀釈度 ×1	2	4	8	16	32	64	128	256
母体分娩前No.15		⧻	⧻	⧻	⧻	⧻	⧺	+	−	−
No.16 家兎哺乳の新生児	生後	⧻	⧻	⧻	⧻	⧺	+	−	−	−
	第1週	⧻	⧻	⧻	⧺	+	−	−	−	−
	第2週	⧻	⧻	⧺	+	−	−	−	−	−
	第3週	⧻	⧺	+	−	−	−	−	−	−
	第4週	⧺	+	−	−	−	−	−	−	−
	第5週	+	−	−	−	−	−	−	−	−
	第6週	−	−	−	−	−	−	−	−	−

b　胎盤通過抗体の消長（表3）

これにより母体胎盤を通過して新生児に移行された免疫抗体価三十二倍のものは、大体一ケ月前後の間新生児体内に存在していることが確認された。

c　初乳における抗体

ウサギにおいて抗体は、単に胎盤のみを通し移行されるものではなく、初乳を通しても移行されるのではないかと考えられ、ヤギ血球免疫ウサギの乳中に免疫抗体が分泌されているか否かについて調べた結果は次表（表4）の通りである。

即ちヤギ血球免疫抗体は乳中に一部分泌されていることが認められた。（その抗体価は母親血清中の抗体価に比して弱く、比例している。）次に乳中の抗体が新生児の哺乳により移行されるか否かを知るため、免疫した母ウサギに、免疫していないウサギの新生児を（六匹のウサギより分娩された新生児は、いずれも同様な反応を示した。）

即ちウサギにおいては比較的多量の免疫抗体が母親から胎盤を通して移行されることが証明された。また同腹の新生児間においてはほぼ同量が移行された。

表 4　山羊血球免疫家兎における初乳中の凝集素価

家兎番号	血清中の凝集素価（分娩前） ×1	2	4	8	16	32	64	128	256
13	⧻	⧻	⧻	⧻	⧻	⧻	⧺	+	−
14	⧻	⧻	⧻	⧻	⧻	⧺	+	−	−
15	⧻	⧻	⧻	⧻	⧺	+	+	−	−
家兎番号	初乳中の凝集素価 ×1	2	4	8	16	32	64	128	256
13	⧻	⧺	+	±	−	−	−	−	−
14	⧻	⧺	⧺	+	−	−	−	−	−
15	⧻	⧻	⧺	+	+	−	−	−	−

分娩後ただちに哺乳させて調べた結果を総括すると、免疫抗体は母体の初乳を通しては移行されないようであり、たとえ移行されたとしても、ごく一部分であろうと考えられる。

〔要約〕

著者はヤギおよびウサギの母仔間における抗体移行の状況について実験を行い、次の事項を認めた。

一、ヤギにおける抗体の移行について

a　免疫抗体は母体胎盤を通過しては新生児に移行されないものと考えられる。

b　母体血清中の抗体は初乳にも認められその量は初乳哺乳後の新生児血清中のそれよりも少なかった。免疫抗体は新生児が初乳をのむことによって二十四時間以内に移行された。

二、ウサギにおける抗体の移行について

a、免疫抗体は母体胎盤を通過して新生児に移行され、その量は母体血清中のそれよりもやや少なく、同腹の新生児個体間においては顕著な差は認められなかった。

b、母体から新生児に移行された免疫抗体価三十二倍のものは大体三週間目で半減され、五週間目では原液に反応する程度になり、六週間目ではいづれも反応しない。

c、免疫抗体は母体の初乳にも認められ、その量は血清中のそれに比例して増加しているように思われる。

d、免疫抗体は一部初乳によっても移行されるようであるが、これについては今後の研究によらねば明らかでない。

（文責　印牧）

「雲」

畜三　Y・K

青々と繁った草の上にねそべる
青空に浮かんだ雲をみつめている
その種々の形は僕の大きな未来の
ようにみえる

青々と繁った草の上にねそべる
青空に浮かんだ雲をみつめている
その姿は田舎に残した恋人の
ようにみえる

青々と繁った草の上にねそべる
青空に浮かんだ雲を見つめている
その形がだんだんと父母の姿に
みえてくる

畜友会便り

書記

昭和三八年度事業計画

一月　卒業生を送る会（記念品贈呈）
二月　畜友会便り発行
四月　ふじみの発行
　　新入生オリエンテーション
五月　新入生歓迎運動大会
　　名簿作成（正会員のみ）
　　アンケートをとる
六月　見学旅行
九月　講演会
十月　講演会
　　収穫祭
十一月　講演会
　　定期総会

畜友会便りは、出来る限り毎月発行の予定、三十七年十二月十二日、都合により畜友会規定の期日より遅れましたが、畜友会総会が行われ、新役員は次の通り決定致しました。

	役員	
委員長	佐川輝男	（三年）
副委員長	矢崎宗一	（三年）
	杉本健之	（二年）
会計	栗原良雄	（三年）
会計補佐	笠原秀成	（四年）
書記	町田尚	（三年）
	渡辺嘉彦	（二年）
企画	汾陽光紘	（三年）
	石井明	（二年）
渉外	鈴木伸一	（三年）
	篠宮孝	（二年）
クラス委員	西原弘人	（四年）
	森井正孝	（四年）
	幡生徹太郎	（三年）
	水井一彦	（三年）
	梅田孝文	（二年）
	境敏光	（二年）
監査委員	印牧美佐生	（四年）
	岡田宏俊	（三年）
	角田幸雄	（二年）
顧問	平林忠	（科長）
	鈴木正三	（主事）

＊三十八年一月茂原農場から厚木農場への移転完了する。

＊一月十九日畜友会役員一同の厚木総合農場見学が行われた。

＊二月一日卒業生を送る会が行われた。

＊三十七年八月七日より三ケ月にわたり、鈴木正三教授は家畜血液型会議に出席のため、又欧米に於ける家畜血清学研究の現況見学のために外遊された。

＊鬼原新之函助教授は家畜類の生乳と大豆蛋白とを原料とするチーズ製造法の発明により特許（三七、一八五六八）をとられた。

＊田中一栄講師は三十八年一月九より二月十四日まで日本原子力研究所ラジオアイソトープ研修所に於て、ラジオアイソトープに関する基礎課程を修了された。

町田記

東京農業大学畜産学科

〝畜友会〟規定

第一章　総則

第一条　本会は東京農業大学畜友会と称する。

第二条　本会は東京農業大学在学生、教職員、および卒業生をもって、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。

第三条　本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章　会員

第四条　本会の会員は左記の三種をもって組織する。
一、正会員　二、特別会員　三、名誉会員
正会員は東京農業大学畜産学科在校生、特別会員東京農業大学畜産科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。

第五条　会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章　役員及び機関

第六条　本会は左記の役員をおく。
一、委員長一名　副委員長二名　書記二名　会計一名
　会計補佐一名　渉外二名　企画二名　クラス委員八名
二、監査員四名

第七条　本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。

第八条　委員長、副委員長、書記、会計、渉外、企画は正会員の中より総会において計十一名選出する。
委員は各学年二名、監査委員は各学年一名づつ選出し、欠員が生じた場合、速やかに補充しなければならない。

第九条　役員の任期は原則として一年とする。

第十条　総会は正会員により構成され、本会の最高決議機関とする。

第十一条　継会は正会員の三分の一以上により成立する。

第十二条　定期総会は、年一回十一月に召集する。
臨時総会は、左記に該当した場合前一ヵ月以内に召集しなければならない。
一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。
二、役員の三分の二以上が必要と認めたとき。

第十三条　総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十四条　総会に於ける議長は、総会においてその都度互選する。
必要に応じて議長は副議長を指名する。

第十五条　総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六条　総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

第四章　業務

第十七条　第六条一項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、この召集は委員長が行なう。

第十八条　本会の事業年度は十二月一日より翌年十一月末日迄とする。但し会計年度は十一月一日より翌年十月末日までとする。

る。

第十九条　本会は左記の業務を行なう。

一、会員親睦会

二、講習会及び研究発表会

二、見学調査

四、機関紙の発行

五、その他第二条に附帯する業務

第五章　会　　計

第二十条　会費は年間五百円とする。その納入は四ケ年分一挨し、入学金と同時に大学会計窓口を通じて納入のこと。

但し転入者は転入年次より正規の手続きを経て一括納入する。

第二十一条　本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。

寄附行為は認める。

第二十二条　納入金の払い戻しは行なわない。

第二十三条　決算報告は十月末日までに作成し公示する。承認は定期総会において行なう。

第六章　監　　査

第二十四条　本会の業務を円滑、正常化する為、監査委員をおく。

第二十五条　監査委員は、前条の目的達成の為年度末に会計監査をおこなう。監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条　監査委員は第六条一項の役員の兼任は出来ない。

第七章　附　　則

第二十七条　本会規定解釈の疑義は委員会において、最終的解釈する。

第二十八条　本会規定の改正及び追加は総会においておこなう。

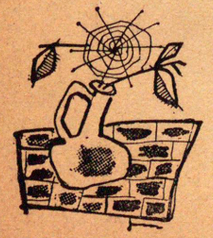
第二十九条　本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

昭和三十七年度卒業論文一覧表

氏名	論文題目	指導者	備考
阿部　勝信	新潟県北部における異常乳について	鬼原	
青柳　征勝	廃鶏肉利用に関する研究	鬼原	
青山　攸二	鶏の管理労力とその経済性	砂川	
鮎川　忠信	鶏肉の貯蔵に関する研究	鬼原	
武用　道三	貯蔵卵白の粟立ち性に関する研究	鬼原	
榎本　宣昭	競争馬に対するダービフードの影響について（特に臨床検査・血液の性状について）	海塩	
原　　厳	ホエイ添加ソーセージに関する研究	鬼原	
林　陽一郎	ブラジル国におけるゼヴー種飼育について	平山	
東　征紀	燻製鶏肉に関する研究	鬼原	
広瀬健次郎	豚肥育末期における肥育剤（ウラジール＝メチルチオウラジール）使用の影響	平山	
堀　宏充	養鶏経営に於ける飼養羽数と施設装備との相関経済性について（共同）	砂川	
市村　敏	養鶏経営に於ける飼養羽数と施設装備との相関経済性について（共同）	砂川	
五十嵐真哉	鶏の血液型物質の血清化合物性状について	鈴木	
伊藤　正利	雄雛に対する鉄剤補給の影響	平山	
柄沢　和夫	飼料費と産卵率の相関々係	砂川	
加藤栄太郎	養鶏経営に於ける飼養羽数と施設装備との相関経済性について（共同）	砂川	
加藤　弘雄	液燻法による燻製鶏製造に関する研究	鬼原	
川満　勝男	鶏の血液型の遺伝に関する研究	鈴木・渡辺	
木下　信夫	鶏卵の貯蔵に関する研究	鬼原	
小玉　敏男	植物性蛋白添加チーズに関する研究（共同）	鬼原	
駒崎　作郎	屠殺前処理が鶏筋肉の貯蔵性に及ぼす影響について	鬼原	
久保　進	植物性蛋白質添加ソーセージに関する研究	鬼原	
国実　直	反雛動物の第一胃内に棲息するプロトツアに関する研究	海塩	
呉本　吉章	鶏卵貯蔵時に於ける乳化力の変化に関する研究	鬼原	
真栄平盛孝	豚肉の塩漬に於ける塩化ナトリユム集積に関する研究	鬼原	
三浦　順夫	植物性蛋白添加チーズに関する研究（共同）	鬼原	
宗近　功	家兎被膜養投与が雛に及ぼす影響	一戸	
永野　慶一	家鶏の雌雛に於ける考察	平林	大日本農会賞
長砂　嘉吉	換気が大雛期から産卵初期の間の発育に及ぼす影響とその経済性	砂川	伊藤賞
長田　工	牛乳無機成分に関する研究（燐鋼の必乳期による食量及び処理時の変化	平山	
中村　輝夫	牛の代謝試験		
中島　康一	鶏胎の発育過程に於ける体液蛋白分屑の変化に関する研究（共同）	海塩	
中谷　裕之	熊本県玉名市三ツ川地区に於ける共同牧場計画	鬼原	
奈良　博	家兎の乾燥被膜養が雄雛の性成熟過程に及ぼす影響について	鬼原	
沼田　智	鶏の屠殺前処理が筋肉の化学組成に及ぼす影響	鬼原	
大浜　英一	抗生物質耐性乳酸菌に関する研究	鬼原	
大沢　一彦	豚の香港輸送の現状とその将来の展望	砂川	
劉　兆真	我国の食肉消費と加工業の発展並びにその将来及び問題点について	鬼原	
斉藤　真	酪農業の新しい多角化経営方式について	砂川	
	人工育草に関する研究（共同）	海塩	科長賞

伊波　正美　仔豚に対する鉄剤投与の影響　平山
篠森　健　白色レグホン種に於ける死卵率並に孵化率に及ぼすビタミンAの影響　一戸
白石　高義　暑熱の産卵生理に及ぼす影響　鈴木
清水　孝義　畑作農業に於ける飼養規模別生産性について　砂川
其田日出夫　雛の早期飼付が発育に及ぼす影響　海塩
杉村貞由美　放牧豚の経済性について　砂川
杉浦　嘉明　鶏胎の発育過程に於ける体液蛋白質分屑の変化に関する研究（共同）　鈴木
須見　泰充　允雄雛肥育中に於けるメチルサイオウラシール投与の影響　平山
高州　康弘　人工育草に関する研究（共同）　海塩
高山　昭夫　人工育草に関する研究（共同）　海塩　科長賞
滝川　昌宏　Tuvela Food(Vitamin)の雄兎及び雄鶏に対する生理学的影響　鈴木　科長賞
田辺　正孝　牛乳処理時のビタミンAの変化について　鬼原
玉城　勇　沖縄に於ける飼養規模別養豚経営調査　砂川
田村　光雄　放射性核物質の山羊乳への移行　海塩
田島喜久馬　鶏肉ソーセージに関する研究　鬼原
友谷　武男　鶏肉存在中の沪紙電気泳動による肉漿蛋白質の変化について　鬼原
鳥井　潤二　家兎の粘質被膜が雄雛の成育に及ぼす影響について　一戸
辻　博康　牛乳の脱塩に関する研究　平林
宇津元一郎　殺虫忌剤使用による効力試験について　鬼原
若山庄太郎　将来の酪農経営構造の一考察　山
山岡　隆彦　ネオフラキン・ヒノキケオール及びオーレマイシンなどソーセージ保存に及ぼす影響　砂川
安原　博樹　紫外線の牛乳に及ぼす影響について　鬼原

米内山義正　ブロイラー養鶏の経済性　砂川
吉田　太一　モレア(morea)給与時に於ける第一胃微生物に関する研究　海塩
楠　兵作　牛乳の保存に関する研究　鬼原
小林　富夫　紫外線殺菌燈照射が鶏の孵化育雛に及ぼす影響　海塩
清水　如弟　紫外線殺菌燈照射が鶏の孵化育雛に及ぼす影響　海塩
木口　靖夫　超遠心分離によるカゼイン各区分の性質に関する研究　鬼原　三浦賞
白石　幸司　ホロホロ鳥血清中のヒト血球凝集素に関する研究　鈴木
佐藤　晃　鶏胎のγ線^{137}Csにより誘発される骨格異常特にその種類と頻度　鈴木
金子　孝一　紫外線殺菌燈照射が鶏の孵化育雛に及ぼす影響　海塩
狩谷　真男　牛の代謝試験　海塩
川島　高明　鶏の成長時に於ける筋肉組成の変化に関する研究　鬼原
桜井　昭　ブロイラー用鶏肉に関する研究（特に風味と化学的組成との関係）　鬼原
住香　博三　カッテージチーズの保存に関する研究　鬼原
熱海　道良　乳質の変化が酪農収益力に及ぼす影響について　砂川　鬼原



編集後記

※ 畜産学科は今年より留年制度をもうけたので編集員諸君、単位の事を気にしながら編集。たまたま先生がそこえ見えた。

A「先生、僕の単位とれましたか？」

先生「君は残念ながら、だめだね」

A、がっくりうなだれてため息をつく。

B「先生、僕は……」

先生「君は大丈夫」

B、胸をなぜおろして、Aの方を見る。

A「……」

※ 今年は、前年より立派にしようとはりきって始めたが途中でつまずきその望みもうすれて現状に致る。

※ 畜産科の諸君！ 君達はどうして文章を書くのを嫌うのかね、君達の文字の結晶が活字になるのだよ、もっと文章を書きなさい。

しかしね、あまりじょうずに書かないで下さいよ、読むのに一苦労するから。あまりじょうずではラブレターを書いても彼女に読んでもらえないよ。それとも、ラブレター書く必要はないのかな。

※ 物価値上ブームでなにもかも値上値上それに〝ふじみの〟の部数は増える一方おかげで会計君四苦八苦している。この調子だと会費の値上も考えねばなるまい。

昭和三十八年四月十五日 印刷
昭和三十八年四月二十日 発行

ふじみの 第三号

編集責任者 矢崎 宗一
発行者 佐川 輝男
発行所 東京都世田谷区世田谷四の四六一
東京農業大学畜友会
EEL（四三）五一七五（呼）
印刷所 共立印刷株式会社

藤田の畜産薬

牛の短期肥育に

牛用ウラジール

ビタミンAD・ミネラルの綜合栄養剤

ニュートレス

ニュートレス〔家禽用〕

鶏コクシジウム症に

トリコクシ®S

豚の肺虫症に

ハイチュール

仔豚の鉄欠乏性貧血や造成に

トンキー®

トンキー®ペースト

豚・鶏の回虫駆除に

ニューパラダウン

販売元 フジモト薬品株式会社 東京都中野区道玄町2

製造元 藤田製薬株式会社 東京都品川区上大崎2—566

酪農家に福音!!

躍進する田村の獣医薬

●まず肝機能検査はこれで

（肝機能検査試薬）

肝テスター「田村」

セット

●頑固な乳房炎にぜひ御試し下さい

カナマスチン「田村」

乳房炎注入剤
カナマイシン主剤
明治製薬と技術提携

○文献及供試品を差上げます 10ml

製造発売元 田村製薬株式会社 東京都板橋区長後2—6 電話（966）代6136～8

出張所 中国，四国，九州